過負荷の魔法少女

馬の糞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
過負荷の魔法少女

【Ｎコード】
Ｎ５９８５Ｔ

【作者名】
馬の糞

【あらすじ】
めだかボックスと魔法少女まどか☆マギカのクロスオーバーもどきです。
めだかボックスや他の西尾維新のキャラクターが多数登場しますがあくまで同じ名前、経歴、力を持つ別人です。その為多少設定、口調などが違う可能性がありますが気にしないでください

「僕と契約して魔法少女になってよ」「過負荷でいいのならね」（前書き）

あらすじでも言いましたがこの物語に出てくるめだかボックスのキャラクターはあくまで別人です

主人公は蝶ヶ崎の妹・・・と言う事になっています

過負荷はそっちに渡ってますが

なので蝶ヶ崎蛾ヶ丸のみ出ない事が確定しています（多分）

それではどーぞ

「僕と契約して魔法少女になってよ」「過負荷でいいのならね」

「僕と契約して魔法少女になってよ」

「魔法少女？」

目の前にいるのは白い猫と兎を足したような生き物

名前はキュゥべえと言うらしい

どんな願いでも叶える代わりに魔法少女になって魔女と戦ってくれとの事だ

僕の目の前でついさっき金髪縦ロールで変なコスプレをした女の子がグロテスクな魔女と言うらしい生き物とさっきまでピカソの抽象画の世界となっていたこの廃墟で戦っていた

僕はそれを退屈しのぎに笑いながら見ていた

偶にこっちに流れ弾が飛んできたけど面倒だから押し付けた

何処の誰に押し付けられたのか僕にも分からない

知る気も無い

知る必要も無い

とりあえず押し付ければ幸せになれる

そう思っていただけだから

「どんな願いでも？」

「どんな願いでもだよ」

病気も怪我も全て他人や他の物に押し付けた

そんな僕に命と釣り合う願いなんて無い

「そうだね。女の子になって裸エプロンで僕に傅け」

「・・・そんな願いをして来たのは君が初めてだよ」

1つ先輩の球磨川先輩が言ってた事をそのまま言っただけなんだけど

却本作りの球磨川禊

同じ見滝原中学3年生

まぁその人がこの間言っていた言葉をノリで言っただけ

ただし1つ違うのは『女の子になって』と言う部分だけ

でもそれは願う相手が人間じゃないから

「駄目ならいいや。うーんそれじゃぁさ。億万長者なんてどう？」

「安易だね」

丁度欲しい釘があった

長さ１ｍ太さ１４ｃｍぐらいの

球磨川が螺子なら僕は釘かな～みたいなノリで選んだんだけど

球磨川にはトランプとかダーツとか武器にしそうだとか言われたよ

当然問答無用で半殺し

まぁ次の日には普通に登校してたけど

最近、安心院さんとか言う人に会って却本作り盗られたらしい

変わりに大嘘憑きって言う能力を貸して貰ったとか

そっちの方が便利じゃない？どんな事でも無かったことに出来るんだし

志布志ちゃんは元気かなぁ・・・最近会ってない

風邪引いたらしい

インフルエンザ

季節遅れにも程がある

もう春だよ

お見舞いに行くと問答無用で古傷を開かれるので行かない

まぁその古傷も押し付ければいいだけの話なんだけれど

「確かに安易でつまらないね。それじゃあちょっと球磨川禊を殺してみてよ」

「そんなのでいいの？」

「あの人が死ぬのかどうか試してみたいからね」

こうして僕は魔法少女になった

翌日、球磨川禊は生きていた

「僕と契約して魔法少女になってよ」「過負荷でいいのならね」（後書き）

主人公の能力は言わずとも分かるでしょうが不慮の事故（エンカウンター）です

それじゃまた次回

人物紹介めだかボックス

蝶ヶ？かなめ

性別　女

年齢　１４

身長　１５４

性質　過負荷

見滝原中学校所属

２年

クラス構成

３５名担任含む

つい最近転校生が来た

とりあえず彼女の周りの席の人間３人は不登校になっている

席は一番後ろの一番端っこ廊下側

説明

過負荷に生まれた少女

他人にトラウマや外傷といったものを押し付けているうちに周りに誰も居なくなった過負荷

能力は不慮の事故

とある別の世界の過負荷の少年と同じ力

名字も同じだけれど彼女に知る術はない

だって別の世界だから

ちなみに同姓同名は兄の方

既に死去している

別の世界の蝶ヶ？に妹は居ない

ＩＦの世界で偶々存在した妹

ここでは妹が過負荷を引き継いだ

兄の方は普通

ジャンプ読者

魔法少女だった頃の能力は釘を刺したモノを呪い殺すただそれだけの能力

そのまま殺そうが生かして後に苦しませて殺そうが自由自在

これは球磨川禊を殺すという願いが反映されたもの

ただしものすごくふざけた心境で願った為、能力的にはかなり弱い力

釘を壊せば簡単に呪いから開放される上に呪いの大きさは釘の大きさによるので気づかれないように小さくしようとすると弱まり場合によっては殺すつもりが口内炎ですみました的な事もありえるという微妙さ

呪う、と言う点では最早魔法少女ではなく魔女の力である

その気になれば使い魔とか出せるらしいがやり方も知らないし魔力的にもまず足りないのでやらない

やったら出来ても即魔女化は免れないだろう

ただし球磨川禊によって願い（呪い）が無かった事にされた時点で呪いの力も使い魔の力も無かったことにされた

今のかなめは魔法少女の絞りカス

能力もタダの釘製造マシーン

ただし釘を打ち付ける為の金槌や釘を抜く為の釘抜き

それとオマケで鋸も出せる

弱くなった代わりに魔女になる心配がほぼ無くなったらしい

穢れが溜まり難くなった

球磨川禊

性別　男

年齢　１５

性質　過負荷

見滝原中学校所属

3年

クラス構成は上記と大体同じ

過負荷「大嘘憑き」ちょっと前まで「却本作り」

過負荷に生まれた少年

主人公の先輩

別の世界に同姓同名でまったく同じ力、経歴の人間が居るけれど彼に知る術はない

だって別の世界だもの

ジャンプ愛読者

三本柱は過負荷の共通認識

ぬるい友情・無駄な努力・むなしい勝利

多分出番はそこそこある

安心院

詳細不明

彼女も別世界に同じ力、経歴、名前を持つ人間が居る

彼女はそれを知っている

志布志飛沫

性別　女

年齢　１４歳

性質　過負荷

過負荷「致死武器」

見滝原中学校所属

2年

クラスは蝶ヶ崎とは別

ちょっと子供っぽくなった志布志

別世界に同じ力、経歴、名前を持つ人間が居るが別世界の事なので彼女の知る事ではない

現時点ではサブキャラなので詳しい設定は無し

人物紹介めだかボックス（後書き）

志布志より前に球磨川と安心院が来ているのは球磨川の方を先に出す予定だったから

実際には球磨川の方が後になりましたけど

登場人物設定世界シリーズ（前書き）

ネタバレありかもしれない登場人物設定です

今回は世界シリーズ勢

登場人物設定世界シリーズ

病院坂黒猫

性別　女

年齢　１５

説明

保健室登校児

学校始まって以来の秀才と呼ばれている

ほむらとはそこそこ話す仲

人と話すのが苦手なはずなのに饒舌

他の世界にまったく同じ経歴、性質、名前の人間が居るけれどいくら病院坂といえど知るわけが無い

病院坂迷路

性別　女

年齢　１４

長い学ランを着ている少女

音楽室に居て喋らない

静かなる人払い令

無口だけれどコミュニケーションが取れるのなら意外と会話は弾む

話すと言うのかどうかは別として

表情豊か

数週間前、学校で起きた殺人事件の探偵役を勤め事件を解決する寸

前に命を落とす

犯人は捕まる前に死亡した

別の世界にほとんど同じ経歴、姿、名前を持つ人間が居るけれど彼

女と言えど知る方法は無い

童野黒理

性別　女

１４歳

嘘付き村の住人

常に嘘しか話さない

何があっても絶対に

精神病とかではなくわざとそうして喋っている

奇人３人衆の１人だったがその内１人は死亡

もう１人はその１人を殺した犯人を殴り殺し現在は少年刑務所に居ると思われる

別の世界に同じ経歴、姿、名前を持つ人間が居るらしいと彼女は知らないが聞けば恐らく知っていると答えるのだろう

嘘付きだから

串中弔士

性別　男

１３歳

姉が居たが例の殺人事件で死亡

犯人は彼の友人

動機を作ったのは彼

自分の周りの人間に姉を殺す動機を意図的に作った

当然それを知る者は居ない

病院坂迷路を慕っていた

童野黒理に求愛中

あくまで日常からの脱却の為

他の世界に同一の人物が居るがそれを知る術は彼にない

・・・かもしれない

登場人物設定世界シリーズ（後書き）

まどかキャラの設定を作る気は今の所ありません

化物語のキャラクターも出したいけど難しそうだ

それでは

「・・・っていう事があった」「頭おかしくなったか？」「過負荷は皆おかしい

2話目です

関係ないですがまどか☆マギカのコミックスを買いました

つーか高ぇよ

「・・・っていう事があった」「頭おかしくなったか？」「過負荷は皆おかしい

「・・・って言う事が昨日あったんだ」

昨日、つまりキュゥべえと契約して魔法少女になった日

その事を志布志ちゃんに話していた

フルネームは志布志飛沫

どんなネーミングセンスだろうと思ったけど私の名字も十分おかしいので何も言わない

「・・・頭おかしくなったか？　おかしいなぁ・・・インフルエンザになったのは私だったと思うんだけど」

言いながら志布志ちゃんは僕の額に手を当てる

同時に僕の体から血が噴出した

「いきなり古傷を開くのはやめてよ志布志ちゃん」

適当にその辺の生徒に１０分の１ぐらいずつ小分けに押し付ける

あまり一気に押し付けると目立つしね

「うわあああああああ」

「いきなり血が・・・血があああああああああああ」

「痛い！痛いよおおおおおおおおおお」

「誰かあああああああああ」

十分目だってた

当然僕らがそれを気にするはずも無く

「ゴメンゴメン。まだ微妙に風邪っぽくてさ。そんなに怒るなよ蝶ヶ崎」

「それならしょうがないね。僕はそんなに怒って無いよ。あとさっきの答えだけど、過負荷は元々おかしい」

「それもそうだ」

話ながら校門をくぐる

後ろでは救急車のサイレンが響いていた

誰かが呼んだのだろう

「それで？魔法少女ってお前、過負荷にそんなのが勤まると思ってるのか？」

「素質あるって猫兎に言われたよ」

「ふぅーん。それでなった訳？」

「ちょっと球磨川先輩が死ぬのかどうか試して見たくなってつい」

「あー確かにあの人不死身だしね。私もそうなったら試してたくて契約するかもしれない」

「まぁさっき元気に学校をサボってるのを見かけたけどね」

「それは元気なのか？」

「元気元気そりゃもう本当に」

本当はものすごく不機嫌だった

安心院さんと会うのがそんなに嫌だったのだろうか

・・・今度殺してみよう

「『やぁかなめちゃん』」

「あれ？球磨川先輩？」

教室周りに誰も居ない席に着くとやってきたのは球磨川禊先輩だった

わざわざ3年の教室からやってきたのだろうか

「『昨日はよくもやってくれたね。君の願い・・・というかあれは最早呪い。それを無かった事にするのは一苦労だったよ』」

「あなたが死ぬのかを試して見たかったんですよ」

「『おかげで嫌な奴に会った』」

「安心院さんて好きな人だったって言ってませんでしたっけ」

「『好きで昔振られたから余計に会い辛いって事分かるよね』」

「過負荷にそんなことが分かるとでも？」

「『分からないだろうね』」

お互い貼り付けたような笑顔で笑う

そして一通り笑った後球磨川先輩は教室を出た

途端に今まで居なかった生徒がぞろぞろと教室に入ってきた

それでも僕の周りに居るはずの3人は居ない

ただの登校拒否だ

ちなみに僕は一番端の一番後ろの席に座っている

ついでに志布志ちゃんの周りにも誰も居ない

『キュゥべえ。球磨川先輩生きてたけど』

僕は念話で足元に居るキュゥべえに話しかける

なんか出来た

『念話の方法はまだ教えてなかったのに無理やりジャックされた・・・僕だって知りたいさ。確かに彼は殺したと思ったのに無理やり君の願いを無かった事にされた』

『願いと言うより呪いだけどね。まぁ大体予想通りだよ。なんでもない普通の事だ』

『どこが普通なのかしらね』

急に間に割って入ってきたのは昨日の魔法少女、巴マミだった

何処が普通かって？

僕ら過負荷にとってはこんな事普通だよ

まして球磨川禊だ

大嘘憑きだ

簡単に無かった事に出来るだろう

大方、死んだ原因については安心院さんが教えたんだろうね

『あなた・・・終わってるわね』

『とっくに自覚はしているさ』

それが過負荷だからね

そんな訳で下校、そして初、魔女退治
なぜかついて来た志布志ちゃんも一緒に
「なんで居るのさ」
「暇つぶし」
帰ってもやる事無いしと志布志ちゃんは言う
僕もやること無いけどね
いやあった
夕飯の準備と洗濯とか色々
別にやらなくても空腹とかなら誰かに押し付ければいいんだけど
どうせならおいしい物が食べたい
結構食い意地張っているのだ僕は
「うわ・・・本当にピカソじゃん」
「とりあえず魔女探しと行こうか」

「そうだな」

僕らは使い魔を狩りながら歩く

志布志ちゃんは古傷を開こうにも作られたばかりの使い魔に古傷なんて物は無いので致死武器は通用しなかった

仕方が無いので僕が使い魔の攻撃を別の使い魔に押し付ける事によってどうにかしてた

「えい」

飛んでいる使い魔に釘を打ち込む

武器を釘にしたのは球磨川先輩の螺子が個人的におもしろいと思ったからで二番煎じが嫌だから釘にした

ちなみに志布志ちゃんは釘バットで殴っていた

楽しそうに笑いながら

僕も笑いながら使い魔に釘を打ち込む

とんとんとこんこんとごんごんとがんがんとざくざくとさくさくとぐざぐざとぐしゃぐしゃとがすがすとめきゃめきゃとぐりぐりとごりごりとぐちゃりと言う音が最後に聞こえて結界が消滅した

何時の間にか魔女の元までたどり着いていたようだ

そしてそのまま何時の間にか殺していた

たったそれだけの話

足元には黒い宝石

これがグリーフシード・・・だっけ

ソウルジェムを浄化するために使うらしいけれど

確かに僕のソウルジェムはほんの僅かに濁っている様に見えた

個人的には濁っているほうがより綺麗に見えるのでそのままにしたいのだけれど死ぬのは嫌なので浄化する

濁って綺麗な色になっていたソウルジェムは途端に澄んだ汚い色に変わる

ほんと・・・魔法少女なんてガラじゃないんだって

「そう思うだろ?蛾ヶ丸兄さん」

何時の間にか志布志ちゃんは何処かに消えていた

多分帰ったか結界の中で死んだか

そんな誰も居ないこの場所で僕は1人、既にこの世に居ない兄の名を呟いた

「・・・っていう事があった」「頭おかしくなったか？」「過負荷は皆おかしい

過負荷らしさを出すのって難しいです

それでは

「蝶ヶ崎」「やぁ志布志ちゃん」「生きてたのかとか聞かないのかよ」（前書き）

サブタイトルは基本作中の台詞から適当に抜粋しています

とはいえ多少の改変はしてあります

「蝶ヶ崎」「やぁ志布志ちゃん」「生きてたのかとか聞かないのかよ」

あの人はきっと根はいい人だと思うよ
わざわざ土を掘り返してまで花の根っこを見る人が居るのかい？それは驚きだ
なんて会話を何時だったか誰かとした事がある
その人はそれもそうだと笑った
まるであざ笑うように
そんな事を考えながら僕は学校へ向かう準備をする
かばんに教科書を入れず漫画の単行本を入れ
制服を着て学校へ向かう

「蝶ヶ崎！」

「やぁ志布志ちゃん」

「全然驚かないな。あの場でいきなり消えたら魔女に殺されたんじゃないかって心配するかと思ってたのに」

「僕がそんなタマに見えるかい？」

「全然」

くだらない戯言のような会話をしながら学校へ向かう

今日もまた怪我人が出たけれどスルーして校門をくぐった

「皆さん。今日は先生から大切なお話があります」

心して聞くように

とまぁどうせいつもの馬鹿話だろうと僕は興味なさげにジャンプに目を移す

昨日魔女退治で買うのを忘れてた

今日は火曜日である

ジャンプを堂々と読んでも誰も文句を言わないこの学校のこのクラス

まぁ僕に注意する人間なんて誰も居ないのだけれど

人間というのは本能的に過負荷に関わる事を避けようとするらしい

例外とすれば安心院のように人間を平等にゴミくずのようにしか見て居ない奴

僕の兄だった蛾ヶ丸

まぁもう死んでるんだけどね

それから誰かの役に立つ為に生まれてきたと豪語している黒神姉妹
＋α

人吉瞳先生とその息子善吉

京都の戯言使いに赤い人類最強

とある田舎町の吸血鬼コンビとその仲間達

保健室登校の学園始まって以来の秀才、病院坂黒猫とその従姉妹で
静かなる人払い令の異名を持つ病院坂迷路

それとその関係者、櫃内様刻と串中弔士

過負荷は除くとしてだからこんな物だろう

あれ？結構多かった

でも善吉以降は過負荷に近い人間の方が多い

田舎町の吸血鬼コンビと赤い人類最強は過負荷でないにしても串中
弔士は明らかに過負荷側だ

病院坂迷路はもう死んでるんだっけ

あと一回くらい話して見たかったけど残念だ

話した事は無いけどね

あの子喋らないし

「えー、あと転校生を紹介します」

何時の間にか馬鹿話は終わっていたらしい

先生は次の話を始めていた

というかそっちを先に話すべきじゃないの？

「暁美ほむらです。よろしくお願いします」

入ってきたのは黒髪ロングの綺麗な子

球磨川先輩の好みドンピシャっぽいな～なんて考えていると暁美ほむらはこっちへ向かって歩いて来た

どうやら空いてる席は僕の周りにしか無いらしい

この三人ってどういう扱いなんだろう

目が合った

途端、彼女は僕に恐怖した

「・・・っ」

「目を合わせるのが怖いかい？だったら合わせなければいい。それだけの話だよ。暁美ほむらさん」

立ち上がりすれ違いざまに彼女にだけ聞こえるように言う

そのまま僕は教室を出た

さて、なんとなく教室を出てしまったけど何処へ行こう

やる事が無いにも程があるねうん

「屋上行けば居るかな」

そうだね

久々に彼女に会いに行こう

全てを腐らせるあの少女に

屋上の扉を開け少し先に居た少女に話しかける

「やぁ。江迎ちゃん」

「あ、お久しぶりですかなめさん」

江迎怒江

過負荷は「荒廃した腐花」

触れた物全てを腐らせる過負荷

最近オンオフ出来るようになったらしく現在は人吉とそこそこいい関係を保っている

オンオフ出来るようになってからはまったく会ってなかったけど暇だったから今日久々に会ってみる事にした

暇だったから

「人吉との関係は進んでる？」

「はい！昨日（ｒｙ」

長いので省略

おまけ「暁美ほむらと病院坂黒猫」

暁美ほむらは保健室に向かっていた

なんで保健室行くって言った時、彼女たちあんな反応したのかしら

と思いながら

少し回想してみよう

『ごめんなさい。ちょっと緊張しちゃったみたいで気分悪くて・・・
保健室に行かせてもらえるかしら』

『『!?』』

ほむらを質問攻めにしていた生徒たちが一斉に離れる

『そ、そっか。転校生だから知らないんだよね・・・』

『?』

という感じのやり取りがあった

「さっきの子・・・あの子も見た事ない生徒だったけど・・・不気味な感じがした」

前の時間軸で一緒に来てくれた鹿目まどかもこの世界では一緒に来なかった

『鹿目さん。あなた保健委員よね。保健室、連れてってもらえる?』

『ぇーっと・・・ごめんなさい。場所教えてあげるから一人で行って貰っていい?』

と言われた

ちょっとショックだった

結構ショックだった

とてもショックだった

かなりショックだった

死にたいと思いかけた

死んで別の時間軸に行ってやり直そうかと思いかけた

なんとか堪えた

現在もなお涙目

さっきトイレで泣いて来た
授業はとっくに始まっていた
「病院坂黒猫・・・ね」
理由を聞くとそういう名前の女生徒がいつも保健室に居るらしい
保健室登校児、人混みが苦手だそうだ
この学校始まって以来の秀才と呼ばれているらしくテストではいつも学年一位
なのに保健室登校児って・・・
ちなみにこの学校、学年一位がざらに居る
この時間軸には、だが
ちなみにその事をほむらは知らない
「・・・また聞いた事の無い名前だわ」
一体どうなっているのだろう
ほむらは何がなんだか分からず混乱していた
他の時間軸では居なかったはずの人間が知る限り3人以上居るのだ
保健室の扉を開ける

そこに居たのはジャージ姿でベッドに上体だけ起き上がらせて本を読んでいる女生徒

病院坂黒猫

名前からして明らかに不吉だけれどそこまで嫌われるような人間には見えなかった

従姉妹もこの学校に通っていたらしい

そっちは静かなる人払い令などと呼ばれそちらは音楽室に放課後いつも居たらしい

普段はたった一人の教室に居た

ただ、この間死んでしまったとか

そんな事はどうでもいい

ほむらが心配しているのは鹿目まどかの事である

保健委員のまどかと保健室に向かう途中に魔法少女になるなと忠告するつもりで居たのにアテが外れてしまった

病院坂黒猫のせいにするのは簡単だがそんな事をすれば絶対信用をなくす気がする

「ハァ・・・」

溜息を付きながら病院坂黒猫とほむらしか居ない保健室のベッドに横になった

「おや？誰が来たのかと思えば今朝やってきたと言う転校生じゃないか。暁美ほむらちゃんだっけ？君は確かついこの間まで入院してて定期的に保健室に行かなければならないって聞いたけど本当だったんだね。今先生は居ないから来るまで横になっているといい。多分その内来るだろう」

人混みが苦手で人と話すのも苦手な人間・・・と聞いたのに

彼女はとても饒舌だった

「蝶ヶ崎」「やぁ志布志ちゃん」「生きてたのかとか聞かないのかよ」（後書き）

最後の病院坂とほむらの会話（成立して無いけど）はなんとなくやりたかったから書きました

この世界は西尾維新の作品の世界がまどか☆マギカに混ざっていると言う事になっています

ほむらは不幸にもそこに迷い込んだと

病院坂の口調難しすぎるって・・・

彼女は大分嫌われていた感じだったのでこの作品内でもかなり嫌われてます

会話する人間は櫃内くんや保健室に行かざるをえないほむら

それとめだかメンバー数人です

つまりメインキャラクターのほとんど

多分出番はほとんどありません

おまけみたいな感じで僕が書きたくなったら加えるみたいな感じで

ほむらは最終話までにある程度のめだかキャラ、及び西尾維新のキャラと出会わせるつもりです

それでは

「どうしてこうなったんだろうね？」「そんな事私に聞かれて分かる訳ねーだろ」

今回のサブタイの会話は物語に出て来ません

何か無いかと思いましたがまったく無かったです

それではどーぞ

2話連続投稿です

「どうしてこうなったんだろうね？」「そんな事私に聞かれて分かる訳ねーだろ」

「・・・まさか江迎ちゃんのノロケ話が放課後まで続くとは思わなかったよ」

「うぅ・・・ごめんなさい」

まぁ別にいいけどね

授業サボれたし

でもまさか人吉とそこまでしか進んでないとは

なんて鈍感なんだろうね人吉は

とんでもないレベル

上条さんじゃあるまいし

交差点で江迎ちゃんと別れ僕はＣＤショップに向かう

「いらっしゃいませぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！」

扉を開けると同時に響く轟音

なんだろうねあの店員は

耳が痛い

怒られてるし

クビになれ馬鹿店員

「さて、っと？」

『助けて・・・』

頭に響いて来たのはキュゥべえの声

『助けない！あえて！』

言ってみた

『助けて・・・まどか』

『誰？まどかって。一般人？』

聞いてないし

とりあえず声の響く方向へ向かう

すると金髪縦ロールの魔法少女、巴マミと鉢合わせた

「なんでこんなところに居るのかしら？」

「過負荷がＣＤショップによったら駄目なのかい？それは驚きだ」

そんな法律があったなんてはじめて知ったよ

で、気づくと使い魔の空間に居ましたよっと

「とりあえず巴さんに任せるな」

「アンタもなんかしなさいよ」

相変わらず険悪なムードの僕と巴マミ

何かやった覚えはないんだけど

キュゥべえはボロボロになってピンク色の髪をした少女に抱きかかえられていた

正面には転校生が立っている

「生きてるかー」

「か・・・なめ・・・」

「よし、死んでるな」

「生きてるよ！？」

ツッコミを入れたのはピンクの髪の少女

そしてその隣で僕を異様なまでに警戒している青髪の少女

同じクラスだったような気がするけど自己紹介の時とか僕ジャンプ読んでて覚えてないや

とりあえずキュゥべえを預かる

「猫兎を助けてくれてありがとう。とでも言えばいいのかな」

「・・・」

途端に雰囲気が悪くなった

そりゃあ居るだけで周りの席の人間を登校拒否に追い詰めるような人間を信用する訳が無い

このピンク髪も僕の事を思い出したようだ

過負荷は嫌われ者

それはどこでも共通である

さて、過負荷にも友人という物は出来るという事は数年前に黒神や
病院坂、それに櫃内やらなにやらに会って分かったけれど僕自身は
そこまで友達という物を必要としていない

邪魔なだけだと思っている

だから誰かに押し付けようと思った

押し付けられなかった

駄目だった

押し付けても押し付けても関係を保とうとして来た

それならそれでいいと思った

後から分かった事

あいつ等は普通じゃない

異常だった

黒神は大抵の能力なら見ただけで十全に扱うことが出来るようになるし

病院坂は何かおかしい

櫃内はどこか壊れていて異常なまでにシスコン

そのせいで一時期絶交を言い渡された（3日ぐらい経った後にすぐ話しかけてきた）

その他も何かおかしい奴らばかりだった

まぁそれはそれで問題は無いと思っていた

普通じゃないなら別にいい

それなら僕に押し付けられた不幸で不幸になる事は無いだろうから

でも

本当に普通の友達が出来るなんて思いもしなかったし思いたくなかった

「私、一人暮らしだから遠慮しないで」

「じゃあ遠慮しないで帰らせていただきます」

「駄目よ」

巴が戦っている間にキュゥべえと談笑していただけだった

そしたら勝手に認められた

普通だと思われた

そのまま家に呼ばれた

何時の間にか鹿目や美樹（さっき名前聞いた）も警戒を解いていた

下手に過負荷について話したのが失敗だったのかもしれない

同情されて勝手に友達認定された

「どんなお人よし・・・？」

誰にも聞こえないよう呟きながら襟を捕まれ引きずられる

これって友達にやる事じゃないよね

「ろくなおもてなしの準備もないんだけどね」

言って４人分の紅茶と５人分のケーキを出す

ケーキが一個多いのはキュゥべえが食べるから

飲み物は飲まないのか

そんな訳で巴の魔法少女講座

「これ、見てくれる？かなめさんも出してくれると嬉しいわ？」

取り出したのはソウルジェム

僕も一応出す

僕のソウルジェムは白い

ものすごく白い

「これはソウルジェム。魔法少女の魔力の源よ」

これってそー言う役割だったのか

知らなかった

僕は変身する為の道具的な物かと・・・

まぁ嘘だけど

「僕との契約によってソウルジェムを手にしたものは魔女と戦う使命を課せられるんだ。でもその代わりに１つだけどんな願いでも僕が叶えてあげられるんだ」

「どんな願いでもって僕のは叶わなかったよ？」

「君の願いは強制的に無かった事にされたからね。個人の魔法の力もほとんど無くなって今はただの釘製造機さ」

「叶えなおしは？」

「さぁね？無かった事にされたっていう前例が無いからもしかすると出来るかもしれないよ？」

「あーそう。まぁいいや」

巴の話は魔法少女にとっては常識のような物である

そんな訳でかなり退屈だった

魔法少女が願いで生まれた存在なら魔女は呪いで生まれた存在とかそんな話

でも僕は呪いで生まれた魔法少女

誰かを殺して欲しいなんて呪いでしか無い

それなのに魔法少女になった

一体どういう事だろうね

「そうそう！さっき話した例の転校生とか！」

「ええ、私も見かけたけど彼女も魔法少女でしょうね」

何時の間にか話題が変わってる

あーやっぱり暁美ほむらも魔法少女だった訳ね

完全に僕はイレギュラー扱いしてたみたいだけど

実際イレギュラーだけどね

僕や過負荷や異常や病院坂一族や戯言遣いも人類最強の赤もその関係者も全てこの世界では完全なるイレギュラーだ

それを知ったのは安心院に教えて貰ったからなのだけれど

『僕らは元々は別の世界の住人だったんだけどね。何かの事故で一緒になっちゃったんだ』

と安心院は言っていた

一体どういう事なのか

僕はこの世界で生まれてこの世界で育ってきたのを覚えているけれどそう言われてみれば何か違うような気がした

この世界は僕ら過負荷や異常が生きる世界とは明らかに違う世界だった

「まぁ・・・戯言だけどね」

僕はここまでの思考を完全に止め誰にも聞こえない声でとある戯言遣いの口癖を呟く

「でもさ、魔法少女って魔女を倒す正義の味方なんでしょ？なんで

まどかを襲ったわけ？」

「彼女の狙いは僕だよ。新しい魔法少女が生まれるのを阻止しようとしたんだね」

「魔法少女は必ずしも味方同士ってわけじゃないの。魔女を倒すとそれなりの見返りがあってね？手柄の取り合いで衝突する事の方が多いのよ」

「・・・じゃあまどかがキュゥべえに声かけられるって目星つけてて、自分に都合が悪い敵を増やさない為に絡んできたって事か」

「多分ね・・・」

「どうしてその思考に行きつくのか分からないよ」

上が巴で下が僕

僕としては魔法少女同士が殺しあってると仕事が増えそうな気がするから出来れば協力してて欲しいんだよね

そうすれば楽になる

だから僕は暁美ほむらを弁解する事にした

「例えば転校生が誰かと一緒に魔法少女になったとして、その誰かが魔女に無残に殺されたとしたらどうする？誰を恨む？魔女を倒しても怒りが収まらない。じゃあどうする？キュゥべえに当たる？無残に死ぬという運命に願いという餌を吊り下げて引きずり込んだキュゥべえを恨むのが合理的。まして転校生が優しい人間だとしたら

これ以上そんな死に方をする人間を増やしたくないと思うのが普通だと思わない？」

大分長い文章になったけれど

「まして鹿目は不幸でもなんでもない普通に幸せな人間だ。不幸な人間には救いが必要だけれど鹿目みたいな幸せな人間に願いなんて不必要だとは思わない？そんな普通の人間を危険な運命に巻き込むキュゥべえを恨みたくなる人間も居ると思わないかい？」」

「「「・・・・」」」

あ、なんか引いてる

「あ、あんたがそんなに長く喋るところ初めて見た」

「私も驚いた」

「・・・」

あーそう言う事

「でもそれなら納得出来るわね。でもキュゥべえを殺すのはどうかと思うけれど」

「こいつ殺しても死なないけどね」

爆弾発言を投下して見る

ちなみに何で知ってるかと言ったら単純に僕が一度殺したからなん

だけど

遊びでノリで

テンションに身を任せて

こういうのって死ぬのかな～と思いながら

でもそれを言ったら信用なくす気がするから言わない

「なんでそんな事知ってるの？」

「この間殺されムグゥ」

「この間６０キロぐらいで走ってる車に引かれてタイヤにずたずたにされたんだこいつ」

余計な事を言おうとしたキュゥべえの口を塞いで言う

テレパシーで話そうとしても無駄だ

魔法でジャックすればいい

「そしたら別の奴が出てきた。こいつ肉体のストックが大量にあるみたい」

ごまかし完了

・・・ってなんで過負荷が信用をなくす事に怯えているのやら

僕は普通になった覚えは無い

まぁでも普通になれるならなりたい

でもそうしたら志布志ちゃんや球磨川先輩、江迎ちゃんたちを見捨てる事になりそうだから僕は過負荷のままでいい

「えっ！？じゃああの転校生のやってる事って無駄な努力！？」

三本柱の一つだね！

「まぁ契約を遅らせる事は可能だから無駄では無い様な無駄なような・・・」

うん無駄だね

一人で疑問に思いながら一人で完結させる僕

「不死身の生き物ねぇ・・・一回死ぬ所見て見たいような見て見たくないような・・・」

「ちょ！さやかちゃん！？」

エグイなこの子

僕も十分エグイけど

「多分ここでやっても代わりはすぐに現れないと思うよ？ストックが死体を処理するところってものすごくエグイから」

「そうなの？」

「別のキュゥべえが死んだキュゥべえの死体をがつがつと・・・」

食べてたなぁ

可愛い顔してもぐもぐと

手で掴んで口に運んで

というかあの手でどうやって掴んでるんだろう

ドラえもん？いやドラえもんは一応磁石とかそう言う事だったような

一応理屈があったはず

うん逸れたね話が

ものすごい

なんでドラえもんの話になってるんだろう

まぁ戯言だけど

「うわぁ・・・エグ・・・」

「君の好奇心ほどじゃないと思うよ」

「ひどッ！」

そんな会話をしているうちに外は暗くなっていく

そんなこんなで僕、蝶ヶ崎かなめはなぜかこれからは巴マミと一緒に魔女退治に向かう事になった

当然というかのように鹿目と美樹も一緒である

どういう訳で？

「どうしてこうなったんだろうね？」「そんな事私に聞かれて分かる訳ねーだろ」

なんだかグダグダの気がします

すみません

「自殺ねぇ・・・まったくくだらねー事しやがって」「本当ですね。ああいうの

2話連続投稿です

それではどーぞ

「自殺ねぇ・・・まったくくだらねー事しやがって」「本当ですね。ああいうの

「それじゃあ魔法少女体験コース第一弾。いってみましょうか」

放課後

僕はいつものように家に帰ろうとしたのだけれど途中で美樹や鹿目に捕まった

そのまま連行現在に至ると

途中、志布志ちゃんや江迎ちゃんなんかも巻き込んで

彼女らにも素質があったのは驚きだ

とりあえず江迎ちゃんには人の心を操る事になるような願いは止めておいたほうがいいって言っておいたから大丈夫だろうけど

人吉と結婚したいとか願ったら確実に人吉は人格を失いそうだし

そうすれば黒神に確実に僕もろとも殺される

江迎ちゃんはどうなるか分からないけど

まぁその心配も無く

『もう人吉くんと一緒に居られて幸せだから大丈夫』

だそうだ

それと志布志ちゃんは

『ああ、こないだの？私もやってみるかなぁ暇過ぎるし』

過負荷が暇なのはいい事だけど

だそうだ

つまり願いなんて無いと

2人とも

それでも体験コースには参加するらしい

腐らせる過負荷と古傷を開く過負荷

使い魔には致死武器は効かない

でも魔女には効くだろう

魔女は魔法少女のなれのはてだ

もしも魔法少女の時の怪我を魔女になってからでも開けたとしたら

・・・爆ぜるね

多分

ボンッっつって

「それで、その2人は?」

「僕の友人です」

「志布志飛沫」

「江迎怒江です!」

「検体名は致死武器と荒廃した腐花」

ちなみに僕は不慮の事故

今更だけどね

「検体名って何?とか色々ツッコミどころはあるけどとりあえずよろしく」

言って手を差し出す巴

でも2人ともその手を取らない

片方は腐らせてしまうのではという恐怖から

オンオフが出来るようになったと言ってもつい最近だ

すぐに不安が取り除かれる訳でもない

ただ江迎ちゃんはもう過負荷ではない

いや、まだ過負荷だけれど人吉と出会ってからはある程度プラスに近づいた

この調子でここから脱出してくれると僕としては嬉しいような気がする

僕自身、過負荷をよしとは思って居ないから

出来る事なら抜け出したいから

でも、この力を捨てるつもりは無い

だから過負荷のままでも良いと言っている

もう片方は馴れ合いなんてするつもりは無いという意思から

過負荷が普通と仲良くするつもりは無いと

「・・・私はこの手をどうすれば・・・」

「とりあえず引っ込めてもいいんじゃないですか？」

巴は渋々といった具合に手を引っ込める

「さて、準備はいい？」

「良くないです先生！」

「冗談です」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

困惑している

ものすごく

とりあえず平常心を少し押し付ける

「さっき体育館から拝借してきた！」

言って美樹が出したのは金属バット

意気込みはいいとの評価

僕は当然無し

志布志ちゃんは大体常にどこかに持っている釘バット

江迎ちゃんは包丁

出刃と柳刃

過負荷だった頃に使っていた物だ

血で濡れている

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

そりゃあね

いきなり地濡れの包丁と釘バットを見せられたらね

「あのあの、安心してください！これ自分の血なので！」

「あ、あぁぁそうなのね？じゃあ安心だわ自分の血なら問題ないわね！」

混乱している

と言うか誤魔化している

自分の血なら問題ないという問題じゃないような気がする

釘バットは明らかに他人の血だし

まぁ時々アレで殴られたり殴ったりしてるからね

「まどかは何か準備してきた？」

あ、逃げた

言われて困惑しながらまどかが出したのは一冊のノート

中には変身後の衣装らしき物が描かれていた

武器は弓矢かそうですか

「「ハハハ

店内の人たちからつめたい視線を受けるがそれで僕らが自重するほど過負荷はまともじゃなかった

腐り切っていた

「ちょ！ひどいよ2人とも！巴さんまで！？」

巴も僕たちみたいに大声ではないがクスクスと笑っていた

「ひどい？・・・鹿目の思考程じゃないよ」

ザックリと刺した台詞は鹿目の心を折るには十分だったようで

そのまま鹿目は机に突っ伏した

「ハァ～・・・」

「い、いやゴメンまどか。つい」

「ごめんなさいね、つい」

謝っているのは巴と美樹

僕たち過負荷組はソウルジェムで魔女探索中

「ちょっと、かなめ達も謝りなよ！」

「私たちにだけ謝らせないでよ！」

上が美樹で下が巴

「スマソ（／＿＾）」

「サーセン（ｂ＾∀＾）

誠意が無いにも程がある僕たちの謝罪

志布志ちゃんに至っては親指を立ててそのまま下に向ける始末

僕でさえ手を前にやってるだけなのに

「ズゥーン」

膝をつく鹿目

「まどかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

叫ぶ美樹

それをスルーして魔女探しを続ける僕ら過負荷組

完全に2手に分かれている

「そう言えば魔女って腐るんですかね」

「さぁ？腐るんじゃね？」

「僕を除いて一番使えるのって江迎ちゃんだから期待してるよ」

「プレッシャーかけないでくださいよ。腐らせますよ？」

「僕はそれを地面に押し付けようと思うんだ」

「あ、私がアンタの古傷開いてそれを使い魔や魔女に押し付ければ・・・」

「それ僕が痛い目にあうじゃん。痛いのは嫌いなんだよ」

「ちっ・・・」

使えない扱いしたのが悪かったのだろうか
志布志ちゃんがいつもにまして怖い
「そ、それよりそろそろじゃない？」
「ん？あ、確かに宝石の光が強くなってるような」
たどり着いたのは廃ビル
屋上には今にも飛び降りそうな女性が居た
「自殺ねぇ・・・まったくくだらねー事しやがって」
「本当ですね。ああいうの見ると軽く殺したくなります」
「同感」
上から志布志ちゃん江迎ちゃん僕
僕ら過負荷はこんなになっても自殺ようなんて考えて居ないのに幸せな人間が自殺しようとしてるのを見るといらいらする
ああいう奴はむしろ死ねばいい
「まぁ、魔女のせいなんだけどね」
彼女の意思ではないのだけれど

やっぱりムカつく

女性はそのままビルから飛び降りた

「あなた達何やってるの！？」

巴が走ってビルの下に向かう

途中変身して

魔法を使い紐のような物で飛び降りた女性を受け止める

「魔女の口付け・・・やっぱりね」

女性の首に付いているのは小さなタトゥーのような物

これは魔女の呪い

呪いの証のような物

これがあるとネガティブになって死にたくなる的な感じだろうか

まだ一回しか戦ったこと無いしその時も大分適当にやってたからいまいち良く分からない

一度僕もこの魔女の口付けを付けられた事があるけれど別になんとも無かった

それは僕が過負荷だから呪いには異常なほどに耐性があるというだけなのだろうけど

多分、黒神にもこれは効かない
あいつは球磨川先輩の却本作りでもマイナスにならなかったような
奴だし
誰でも平等に人間として見ている
そんな化物

「なんて、戯言だよ」

最近戯言遣いの口癖を言う事が多いような気がする
戯言になっているのかどうかも分からない戯言だけど
もしかするとただの照れ隠しか何かなのだろうか
分からない事を考えてても面倒なので僕はその疑問を何処かの誰か
に押し付けた

おまけ「暁美ほむらと変態」

一体ここはどうなっているのだろう

暁美ほむらは考える

さっきも知らない人間を何人か見かけた

飛び級と言っている子供まで居た

飛び級制度って日本には無かったはずだ

「・・・なんなのよここは・・・」

1日経ってもやっぱり分からない

物思いに耽っていると後ろから叫び声が聞こえた

「めぇぇえええええええだぁぁぁあああああああかぁぁぁああああああああちゃあああああああああああああああん」

「は？」

振り向き様に見知らぬ男に抱きつかれた

一瞬呆けた

そして

「ひっ・・・きゃあああああああああああああああああああああ」

悲鳴を上げた

「ん？あ、人違いだった」

人違い！？人違いで見知らぬ男に抱きつかれたの！？

ほむらはめだかと言う女の子に同情しつつ男を引き剥がす

男は特に抵抗も無くはがれた

「ゴメンゴメン。妹と間違えちゃったよ」

後姿が似てるもんでね

男はそう言った

「僕は黒神真黒。三本柱は友情努力勝利じゃない妹妹妹だッ！」

「変態か・・・」

「変態じゃない！妹を愛するお兄ちゃんだ！！なんなら君も僕をお兄ちゃんと呼んでべぶらっ！！」

わけの分からない事を言い出した変態男、黒神真黒は最後まで言う前に何かに吹き飛ばされた

落ちてきたのは

「・・・スーパーボール？」

「風紀を乱すのはゆるさねーぞ黒神真黒。つーかお前はもう卒業してんだろうが」

「や、やぁ冥利くん・・・」

「気安く呼ぶんじゃねえ殺すぞ」

「お兄様、この女の子に何をしている？」

やってきたのは飛び級でここの風紀委員をやっているとさっき聞いた雲仙冥利と

綺麗な黒髪の多分年下の少女

どうやらこの変態の弟らしい

「暁美二年生、この変態に何か変な事はされて居ないか？」

「え、大丈夫よ・・・」

「そうかならいい。次からこいつに何かされた時は私に言え。こいつを殺して解体して並べて揃えて晒してやろう」

怖い事を言う

でもそうでもしないとこの変態は反省しないような気がしたので黙っておく

「私は黒神めだか。この学校の生徒会長だ。私は２４時間３６５日、誰からの相談でも受け付ける。困った事があったら是非相談するといい。目安箱も設置してあるから話しづらい事だったらそこに投書してくれてもいい」

こうして暁美ほむらは黒神めだか、黒神真黒、雲仙冥利と知り合ったのであった

「何このオチ」

「自殺ねぇ・・・まったくくだらねー事しやがって」「本当ですね。ああいうの

今回のおまけ

ほむほむの出番が少ないからというのとほむらとめだかってなんか
髪型似てるよねという理由からなんとなく真黒とほむらを接触させ
て見たくなった

ただそれだけの話

ちなみにめだかは中1です

それではまた次回

「赤い征栽」「人類最強」「赤・紅・朱」（前書き）

今回は戯言シリーズからあの人が登場

一応サブキャラそれも恐らく今回限りの出番なはずなのに滅茶苦茶派手な登場をさせてしまった

ヒントはサブタイにあり

「赤い征栽」「人類最強」「赤・紅・朱」

廃ビルの中に入ったら蝶がたくさん飛んでいた

「綺麗ですね。腐らせてもいいんですか？」

「存分に腐らせてやるといいよ江迎ちゃん。こいつらが居ると見返りが来ないから」

まぁアレを見返りと呼べるのかどうか分からないけれど

ただの魔力回復アイテムだ

エーテルだポーションだエリクサーだ

戦うつもりなら必要だけれど戦わないのならあまり必要ない

そもそも穢れも魔女と戦わなければ溜まらないのだから

他の魔法少女に売るっていう手もあるけれど

そうすれば金になる

「何を考えているのかしら？」

「グリーフシードって他の魔法少女相手に売れるのかなって」

「売るって・・・」

「１０００円ぐらいで」

「・・・・」

呆れかそれとも過負荷に対する嫌悪感が戻ったか

離れていくのならそれはそれで別にいい

受け入れられなかっただけの話だ

負の現実を

僕は使い魔に釘を打ち付けながら

江迎ちゃんは敵を掴んで腐らせながら

志布志ちゃんは釘バットで叩き潰しながら

奥へ奥へと進んで行く

たどり着いたのは広い部屋

真ん中には魔女

描写は面倒

だってもう死んでいるから

「・・・あれ？」

結界が消えていく

今消えたと言う事は魔女が死んだのは僕が入る寸前か直後

でも一体誰が

「・・・ったく、ちっと野暮用で来ただけだってのになんであんな面倒に巻き込まれなきゃいけねーんだよ」

魔女が居た場所に立って居たのは髪も服も靴も全てが赤い女性

「赤き征裁（オーバーキルレッド）」、「死色の真紅」、「砂漠の鷹（デザートイーグル）」、「一騎当千」、「仙人殺し」、「嵐前の暴風雨」

典型的主人公体質、アンチ癒し系

異名の中にある「赤き征裁」「死色の真紅」からも分かる通り赤が大好きなこの人は

納得、この人なら魔法少女じゃなくても十分魔女を狩れる

「お？もしかして蝶ヶ崎？」

「げっ・・・」

「あ、お久しぶりです」

「こんにちは」

僕ら過負荷組は何食わぬ顔で挨拶する

志布志ちゃんは一瞬露骨に嫌そうな顔をしたけれど

「マミさん。魔女って一般人に倒せる物なんですか？」

「そんな訳無いでしょうそう？だとしたら魔法少女なんて必要ないわ」

「ですよねー」

なんて会話が後ろから聞こえる

生憎彼女は一般人ではない

「炎上するビルの４０階から飛び降りても無傷だった」「マシンガンの零距離射撃を腹筋に食らっても生き残った」「千人の仙人相手に勝った」「哀川潤の踏み込んだ建物は例外なく崩壊する」などと言うありえない武勇伝があるような化物だ

それでも分類上は一般人だと言っていたけれど、彼女を一般人として扱ったらいけない気がする

哀川潤

人類最強の請負人である

「やぁ僕も想定外だったよ。あんな化物がこの世に存在したなんてね」

哀川さんが去った後キュゥべえが呟く

あの人が化物と言うのは否定しない

むしろ全力で肯定しよう

「あんた知り合いっぽかったけどあの赤い人何者?」

「（説明中）」

「千人の仙人相手に勝ったっていうのはギャグ?」

「生憎事実である可能性の方が高い」

「化物ですか」

「化物ですよ」

アレをどうにか出来る奴として思い浮かぶのは黒神めだか・・・それから安心院さんぐらいだけど

どうだろう

安心院さんは

『僕は彼女には勝てないよ。なんたって彼女は主人公だからね』

と言っていた

黒神は

『一応私の尊敬する人の一人だ。勝てるなんて思っていない』

って言ってたし

つまりまぁあの人に勝てるのは誰も居ないと

人類最終と言われた想影真心も勝てなかったようなあの人の事だ

魔女ごときでどうにかなるとは思えない

僕もあの人には昔散々振り回された

ちなみに、あの人の野暮用というのは失踪した零崎人識を探してくれと無桐伊織に頼まれたからだそうだ

現在全力で追跡中だそうです

とりあえず人識の命の無事を願わずに合掌

「今回ばかりは傑作だ」

殺人鬼、零崎人識の口癖を呟きながら僕は帰路についた

おｗまｗけ「ほむほむと人類最強」

一体なんだったのかしらあの赤い人

ほむらは鹿目たちを尾行している時、魔女の結界の中に巻き込まれ
魔女を倒したあの赤い人の事を考えていた

いや別に恋とか愛とかそう言う訳ではなく

単純に何者なのだろうと言う疑問

見た感じ悪い人間には・・・見え・・・なくもない

目つきが悪い

でも過負荷のような気持ち悪さはなかった

「魔女を片手で倒す人間が居るとは思わなかったけど」

それは哀川潤が魔女と戦っている時の事

その場にはほむらも居た

一般人が襲われているのを見て助けようと思ったけれどその必要は
無いと言わんばかりに哀川潤は魔女を圧倒していた

使い魔もグーパンや裏拳などで沈め

魔女本体もたこ殴り

最終的に倒してしまった

何か語りかけていたようにも見えたけど遠目からではよく分からなかった

「・・・なんだったのかしら」

「あたしの事か？」

「ひゃあ！」

目の前に突然現れたさっきの赤い人

「さっきアンタ私の事見てたよな？バレないとでも思ったか？」

「ひ・・・ぇう」

ヤバい

この人怖い

チンピラみたいだ

普通のチンピラならほむらはここまでビビらなかっただろう

だけどこの女の人は先ほど魔女を圧倒し簡単に倒して見せたような奴だ

そんな人間に絡まれればビビッてもしょうがない

「ちょ、んなビビんなよ別に取って喰う訳じゃあるまいし」

「あ、あのあのあの」

何時の間にか自分がループの最初の頃の自分に戻っているような気がするけれど戸惑っているほむらがそんな事に気づく訳も無く

「あ、あなたは一体・・・？」

「哀川潤。請負人だ」

「請負人？」

それが哀川潤と暁美ほむらの出会いだった

まぁ世界中あちこちを回っている哀川潤に一箇所に留まる暁美ほむらが出会う事はまずないだろうけれど

縁があったら合えるかもしれない

「赤い征栽」「人類最強」「赤・紅・朱」（後書き）

そんな訳で哀川さんの登場でした

おまけは多分結構頻繁にやると思います

主に鹿目まどかと接触する機会をほぼ完全に失ったほむらがいろんな西尾キャラと出会って振り回されたりするというオマケ

病院坂から始まり黒神兄妹、雲仙、そして今回人類最強

人類最悪も出したかったんですけどタイミングというかなんというかやっぱり難しかった

ちなみに串中くんは現在引きこもり中です

この間迷路が死んだばかりと言う事になっているので

多分劇中内であと2日も経てば出てきます

そんな設定のカオスな世界設定

それではマタ次回～

「何やってるんですか球磨川先輩」「『ナースさんをナンP』」「ああもういいよ」

今回もおまけ付き

今回もほむほむが西尾キャラに振り回されます

「何やってるんですか球磨川先輩」「『ナースさんをナンP』」「ああもういい

釘を打ち込み使い魔の動きを封じる

止めに巴がティロフィナーレでまとめて吹き飛ばす

そんな魔女（の使い魔）狩りの帰り道

「４人とも何か願い事は見つかった？」

「幸せになりたい・・・と言う訳で金をくれ」

「私は善吉くんが喜ぶ物を」

巴の質問に志布志と江迎が答える

江迎は一番真っ先にこの願いを決めた

早すぎる

巴さんは誰かのために願いを使うのはあまり良くないと言っていた

その言葉に対し江迎ヤンデレ化して対抗（元々ヤンデレだけれど）

と言う訳である

まぁ江迎はあまりやる気は無いらしいけど

魔法少女なんてやってたら人吉と一緒に居る時間が減るし喜ぶ物な

ら自分で選ぶからってさ

まぁ僕もやらせる気は無いし

キュゥべえが素質あるからって誘っただけだから

鹿目と美樹はまだ決まってないらしい

「そうだ！」

何がそうだ？

「かなめとマミさんはどんな願い事したんですか？」

「球磨川先輩は願いなら死ぬのかどうか試して見た」

躊躇無く答える

しれっと

「サラッととんでもない事を言ったような気がするけど気のせいだよね」

「きっと気のせいだよ鹿目さん」

「気のせいじゃない！気のせいじゃないよまどか！」

「大丈夫、僕は人殺しじゃないから」

多分

何度か事故った時に怪我押し付けた事あるからそいつが死んでたら人殺しになって居るだろう

まぁそれは不慮の事故だから僕の知ったことじゃ無いけど

「試して死ななかったからね」

「いや願いは本当かい！」

「本当だよ。あの人不死身だから試してみたんだ。結果は翌日何事も無かったかのように登校してきやがりました」

大嘘憑きはやっぱりとんでもなかった

でもそれでも勝てないんだよねあの人は

誰にも勝てない

絶対に

「やっぱりアンタおかしいよ」

「自覚してるし受け入れてる。それに君らはそれを知ってて僕とこうやって話しているんだろう？」

「まぁね。アンタを更生させようと思って付き合ってるから」

「ふーん」

ちなみに、巴は考える余裕さえも無かったらしい

家族でドライブに行ったところで事故にあって死にかけてたところにキュゥべえが現れてその場で契約して生き延びたとか何とか

さりげなく不幸自慢の中にに家族なんてそう言う幸福自慢されてもね

僕たち過負荷には家族さえも居なかったんだから

まぁ自業自得かもしれないけれど

そんなこんなで翌日

現在位置は学校の教室である

相変わらず僕の周りに人は居ない

ちなみに本日火曜日

今週こそはとコンビニに向かう途中で先日の魔女退治に巻き込まれた為再びジャンプを買い忘れていた僕は仕方が無く今日学校へ行く途中で買った

既に学校の授業の内容は理解出来て居ない

過負荷を自覚した頃にはもう勉強に興味なんて無かったから

そもそもやる気も無いし

「サボろうかなぁ」

それもいいかも知れない

『駄目に決まってるだろおおお

ガンガンオンラインコミックス

ばらかもん４巻とアホリズム７巻は好評発売中です

妙な電波を受信したような気がするけれどどうせ作者の好きな漫画の薦めか何かだろう

ついでにアホリズムの二次創作もあるよ

宣伝すんな

『いきなり念話で叫ばないでよ』

『アンタがいきなり授業サボろうとするからでしょうが。それにジャンプ読んでるし・・・仕舞いなさい』

『ただいま留守にしております。ピーと鳴りましたらご用件をお話ください』

『わあああああああ

『ハァ・・・なんで先生は注意しないのよ』

『先生も僕の事を怖がってるからね』

『アンタ今までこの学校で問題起こした事あったっけ?』

『サボりとジャンプ購読以外には特に思い当たらないねぇ』

『それで注意されたことは?』

『無い。過負荷は男女平等に嫌われるんだよ』

『なら私が注意するからやめなさい』

『あとでクイーンパフェ奢ってあげるから見逃して』

『あーどうしよ』

『ちょ!さやかちゃん!?』

『よし。交渉成立。それじゃ』

『あ、かなめちゃん待っｔ』

プツリ

念話を止めてジャンプに目を落とす

れんほうってどういう漢字だっけ

うん僕も分かんない

『おーいちょっとー』

『何？』

『やっぱクイーンパフェいいや。だからジャンプ読むの止めてちゃんと授業受けなさい』

『残念、まぁジャンプは読み終わったからいいか』

『早ッ！まだ１０分も経ってないよ！？』

『うん』

仕方が無い

交渉が決裂したのならジャンプを読むのを止めるしかなさそうだ

僕は読み終えたジャンプをかばんに仕舞い教科書とノートを出す

受けても授業はまったく分からないのでノートの隅に落書きを施した

周りに誰も居ないので誰かに見られる心配も無くって

『キュゥべえ。なんで僕の机に座ってるのかな』

『かなめって何気に絵うまいよね』

『そうか。よし死ね』

言ってキュゥべえの頭を掴み廊下に放り捨てた

そして廊下に釘付けにしたら終了である

どうせまた新しいインキュベーダーが来るのだろう

『君に殺されたのはこれで３０回目だよ』

『やったねこち亀３０周年』

『あの名作と一緒にしちゃ駄目だよ。それにこち亀は３５周年だよ』

『知ってるのか』

以外すぎる

感情無いんじゃないのかキュゥべえ

『他の魔法少女の認識だよ』

『なーる』

そんな感じで新しいキュゥべえとグダグダな会話を続けているうちに授業は終わった

授業の疲れを適当な誰かに押し付けかばんに教科書とノートを詰める
まったく使って居ない教科書だけれど異常なまでに傷がついていた
教科書にも傷を押し付けていたのか誰かが傷つけたのか
僕にはどうでもよかったしどっちでもよかった
さぁ帰ろうと言う所で美樹と鹿目に呼びとめられる
「一緒に帰んない？ちょっと私は寄るところあるけどどうせ暇でしょ？」
「いやぁ実は今日はオンラインゲームでニルベウスを倒す約束を・・・」
「そんなの後でいいでしょ？」
まぁそうだけどね
そのまま連行されました

人権というのは無いのだろうか

過負荷には無いか

そもそも人権なんて飾りだろう？

国の権限一つでひっくり返せる物なんだ

民主主義だって天皇がやっぱり社会主義にすると言い出せば社会主義に変わるのだろう

そんな物だ国なんて

まぁそんな事をすればクーデターは免れないだろうけど

革命じゃー

まぁ戯言だけど

所変わり病院の待合室

美樹の用事と言うのは病院の友達のお見舞いと言う事らしい

交通事故で入院中

左手が動かなくなったらしい

元天才バイオ・・・バ・・・なんだっけ

分からん

確かバイオリンを弾く人

名前なんて知る物か

それで大分落ち込んでいるから励ましに行っているらしい

ハァ・・・なんでだろうものすごくムカつくわ

たかが交通事故で手が一つ動かなくなった程度で自分は不幸ですオーラ出してんじゃねーっつーの

＊したくなるじゃないか

「ん？」

あ～っとあそこに居るのは？

球磨川先輩

何やってるんだあんなところで

「どうしたの？」

「いや、ちょっと顔見知りを見つけてさ」

「話しかけないの？」

「一度殺した相手だよ？」

「例の球磨川先輩？」

「まぁね。ちょっと話しかけてみようか」

言って僕は球磨川先輩の心臓に釘を刺す

服の下から見えないようにグッサリと

「『痛いじゃないか何をするんだよ』」

「きゃぁあ！」

「こんちわ球磨川先輩」

「『やっぱり君か・・・いい加減興味本位で僕を殺すのはやめてくれないか？』」

「そんな無表情で言われてもねぇ。あ、分かりましたから螺子を刺そうとしないでくださいって」

僕は螺子を持つ球磨川先輩の腕を掴みながら訴える

平然と、飄々と

「『まぁいいや』」

「所で球磨川先輩は何で病院に居るんですか？」

「『ナースさんをナンｐ・・・』」

「ああもういいです。分かりましたから死んでください」

銃口をつきつけながら言う

どこから出したかなんてそんな小さい事どうでもいいじゃないか

「『そんなの頭に喰らったらさすがに死んじゃうよ』」

「だから死んでくださいって言ってるじゃないですか。とりあえず表出ましょう。ここじゃ迷惑です」

どうせ大嘘憑きでなかった事に出来るのだろう？

「よっお待たせ！なんで外に居るのさまどか～・・・って何やってんの？」

「さやかちゃん！かなめちゃん止めて！」

「『うーわー殺されるー』」

「だから死んでくださいって言ってるじゃないですか。死んで安心院さんにいじめられてきてください」

「『それだけは勘弁してくれよ』」

「じゃあ抵抗しないで死んでくださいよ。そのでかい螺子放してさぁ」

「どういう状況？」

「えーっとあのーそのーえーっとかくかくしかじかで」

「いやかくかくしかじかて漫画じゃあるまいし」

小説だから大丈夫！

「ハッ・・・！今の電波は一体・・・！あーなるほど分かった。無理」

「ちょ！ええ！？」

「私にあれを止める自信は無いッ！」

「断言しないでよぉ！」

そのやり取りは数分後、孵化しかかっているグリーフシードを見つけるまで続いたと言う

おまけ「ほむほむと不知火と嘘付き村の住人」

「迷ったわ・・・」

この学校、見滝原中学校は最早ほむらの知る見滝原中学校とは違っていた

なぜなら

明らかに広くなっているのだ

見知らぬ人間が増えた分だけクラスの数も増えている

１０に満たない程だったにも関わらず何時の間にか１０を超えていた

その結果校舎も広くなり結果

「迷ったわ・・・」

こうなったら道を聞くしかない

今のほむらは転校して間も無い

一応別の時間軸での知識として学校の見取り図は知っていたはずだけれどそれは異常とも言える数のイレギュラーが入る前の話である

現在の学校の見取り図は複雑すぎてまだ覚えきれて居ない

「でも全然人居ない・・・」

当然である
だって放課後だもの
「ん？」
足音
どうやら人がまだ居たようだ
そっちの方へ向かって見ると身長が小学生程度しかない小さな少女が大量のお菓子やドーナツを食べながら歩いていた
「あの」
「うん？」
「道に迷ってしまったのだけれど・・・」
「あー、それならあの人に聞くといーよ。名前は？私は不知火半袖だよ☆」
不知火が指を刺した方向には濃い青色の女生徒が歩いていた
「暁美ほむらよ。ありがとう」
言ってほむらはその女生徒に近づく
「あの、道に迷ってしまったのだけれど・・・校門まで案内してくれないかしら」

「・・・嫌よ。私について来ないで」

全力で拒否された

そのまま女生徒は行ってしまう

そして１０ｍほど離れたあと、踵を返し戻ってきた

「ついて来ないでって言ってるでしょう」

目の前までやってきて言う女生徒

「いや、ついて行って無いわよ・・・？」

訳の分からない言動に困惑するほむらとそれを見て笑いを堪えている不知火

「どうかしたんですかろり先輩」

そこに救いの手を差し伸べてくれたのは一人の男子生徒だった

「彼女に道案内をするつもりは無いわ」

「ああ、そうですか。君、転校生？」

「え、ええ」

「この人嘘付き村の住人だから。ついて来ないでって言ってたのならついて行くのが正解だよ」

「私は嘘なんて生まれてから一度も付いた事なんて無いわ。世界一の正直者とまで言われたほどよ」

ああ、なるほど

ほむらは納得する

その様子を見ていた不知火は堪えていた笑いを一気に吐き出した

「あひゃひゃひゃひゃひゃひゃ☆」

「ぐっ・・・」

嵌められたとほむらは思う

「僕は串中弔士です。彼女はろり先輩こと童野黒理さん」

「あ、え、ええ。よろしく」

そんな訳でほむらは不知火、童野、串中と出会った

「何やってるんですか球磨川先輩」「『ナースさんをナンP』」「ああもういいよ」

と言う訳で正喰者こと不知火半袖と不気味で素朴な囲われた世界の串中弔士と童野黒理さんでしたー

ほむらのキャラを壊して行くのは中々面白いですね

西尾キャラクターは濃いのが多いので結構まともなまどかマギカのキャラクターはその言葉回しに簡単に振り回されそうです

次回のネタバレ

「次回予告と言え」

巴マミさんは『一度』殺す気でいます（笑）

それではまた次回～

「無意味で無関係で無価値で何より無責任。それが過負荷だよ」（前書き）

めだか勢のキャラクター達の状態はどれも時系列バラバラですが気にしないでください

原作では年齢同じでもこっちでは違うなんて事もありますので

今更ですけどね

それではどーぞ

ああ、あとＰＶが１００００突破しました

ありがとうございます

「無意味で無関係で無価値で何より無責任。それが過負荷だよ」

孵化しかけのグリーフシードによって結界の中に閉じ込められた

鹿目は巴を呼びに行った

「さて、待とうか」

「『そうだね』」

「いや球磨川先輩はともかくアンタは戦えるんだから戦いなさいよ」

「じゃあ球磨川先輩に任せよう。呪いには呪い。より強い呪いが勝つのは当然だと思わない？」

「意味が分からないし」

「『僕は今まで勝負事に勝った事ないんだけど』」

「知ってますよ。いっそ無かった事にします？このグリーフシード。穢れが浄化できないけどそれもいざとなったらなかった事にすればいいし」

「あんたどんだけ無責任なのよ」

「そうだね」

「『無意味で無関係で無価値で』」

「何より無責任」

「「『それが過負荷だよ』」」

僕と球磨川先輩は同時に言う

「スゥ・・・」

「いっそ契約もなかった事にして貰って契約し直そうかな。そうすれば願いが無限に・・・ハッ！僕天才！？まぁそういくつも願いがある訳じゃないけどね」

「『だろうね。それに僕は君の為に一々過負荷を使う気は無いよ』」

「まぁそうだろうね。僕も期待してないし」

「巴さあああああん早く来てえええええええええええ！」

失礼な事を叫ぶ美樹の頭を平手で叩き黙らせる

そのままグリーフシードを釘で囲って見た

2重にも3重にも何重もの釘の檻を作る

さすがに出られないかなぁ

「あ、孵化始まった」

「えっ！？マミさん早く来てェェェェ！？」

美樹が叫んだと同時に僕の樹脂ハリセンが美樹にヒットする
結構硬い
「痛ッ！！ナニコレ！？」
「ハリセン」
「せめて紙の奴使ってよ」
「分かった」
叩いた
極限まで硬くしようと目指した丸めた新聞紙ブレードで
「イタッ！ちょ！それハリセンじゃないじゃん！」
そんなグッダグダなやり取りをしているうちに釘の檻が砕ける
同時に巴と鹿目がやって来た
「お出ましのとこ悪いけど、一気に片付けてやるわ！」
言って魔法を使い人形のような姿をした魔女を拘束する
「こりゃ僕の出番無さそうだね」
「だね」

そのまま巴は巨大な銃を魔女に向ける
すると魔女が口から巨大な芋虫のような化物を吐き出した
「えっ・・・？」
呆然として誰も動けなかった
美樹も鹿目も当然、巴も
ぐちゃり
そんな音が聞こえ巴の変身が解け胴体が地面に落ちる
それを追って芋虫が一気に降りてきた
僕は釘を打ちつけこれ以上巴の体が傷つかないように魔女を遠ざける
鹿目と美樹は未だ呆然としていた
「球磨川先輩、どうにかなりますかね」
「『ハァ・・・僕にやれと？』」
「後で魔女退治の仕事が増えるのは嫌なので、さっさと無かった事にしてやってください」
僕は球磨川禊にそう言った
感情をまったく動かさず

平然と無かった事にしろと言う

この程度では動じない

クビ無しスプラッタ死体程度で怖気づいたりはしない

もっと残酷な物はいくらでも見た

ぐちゃぐちゃになった人間だった物や有刺鉄線に縛られた肉槐やら

ハッキリ言って見飽きた

「『さぁて・・・Ｉｔ'ｓ　ａ　ａｌｌ　ｆｉｃｔｉｏｎ.』」

「かっこつけてる場合ですか・・・？」

言いながら僕を食おうとする魔女の体を釘で拘束し、何度も何度も

釘を打ちつけた

ほむらが後からやって来た

その時にはもう結界は解け

気絶はしているがまったくの無傷の巴マミが地面に横たわっていた

「え・・・え・・・？」

「あれ・・・？さっき確か・・・頭が・・・」

美樹と鹿目は当然のように混乱している

当然だから仕方が無い

「『過去も現在も全て無かった事にする過負荷、大嘘憑き。便利だけど無情だとは思わないか？』」

「便利ですね。貰えるのならぜひ貰いたいですよ。無情と言うのにも同感です。努力も苦労も不幸も全てなかった事にするんですからね」」

「『過負荷は皆無情なんだよ』」

「無情なんじゃなくて無感情なんじゃないですか？」

「『無関心が正解じゃないのかな？』」

「そうですね」

僕たちは目を覚まし混乱し恐怖している巴マミの目の前で平然とそんな会話を繰り返す

貼り付けたような笑みで笑いながら

その会話を見ながら美樹と鹿目は一歩後退った

それを傍目に見ながら僕は笑っていた

おまけ「ほむほむと古賀いたみ」

ある日ほむらはとんでもないものを見た

「・・・」

開いた口が塞がらない

なぜかってそれは

「天井を歩いてる・・・」

からである

彼女の名前は古賀いたみ

検体名は「骨折り指切り」

人為的に作られた異常で能力は異常な身体能力、治癒能力

異常性は異常への執着

そんな少女が普通に廊下を歩いている顔面包帯まみれの少女と話しながら天井を歩いていた

「・・・・」

彼女とほむらに接点はまったく無い

だから彼女たちはほむらをスルーして行く

すれ違いそのまま何処かへ行ってしまった

当然、話しても居ないのでほむらは彼女たちの名前を知らない

「・・・本当・・・変な所ね・・・この時間軸は・・・」

呟き、ほむらは保健室へ向かう

最近よく話し仲も中々良好になった彼女、病院坂黒猫と話しに

「無意味で無関係で無価値で何より無責任。それが過負荷だよ」（後書き）

今回のオマケは短めでその上ほむらと古賀はまともに接触してないっていう

何時の間にか病院坂と仲良くなっているほむら

当然病院坂にとって一番仲がいい友人は櫃内くんです

それじゃまた次回

「区別はクラス替えで差別は迫害」「過負荷？当然区別さ。人と人外はちゃんと分けるべきだ」

今回は２本立て（？）です

前半がかなめ視点

後半がほむら視点の三人称

それだけ

どちらか片方でもどちらもでもいいです

それじゃどーぞ

「区別はクラス替えで差別は迫害」「過負荷？当然区別さ。人と人外はちゃんと

差別と区別の違いが分からない人間と言うのがいるらしい

そんな訳なのでここで差別と区別の違いを分かりやすく言ってみよう

例えるのなら

区別はクラス替え

差別は迫害

全然違う

区別はやるべき事

差別はやってはいけない事

じゃあ、過負荷を遠ざけるのは差別なの？

いいえ、区別です

だって彼らは人間じゃないから

人と人外は区別しないと

「何だこれ」

なぜか頭に浮かんだネガティブすぎる言葉

自分のネガティブさには呆れるなぁと僕は思う

ちなみに、先日巴が死にかけた・・・

というか一度死んだ後、巴は魔法少女である事を放棄した

あの時、頭から食べられた事がトラウマになったのか

それとも、一度死んでから改めて魔法少女の危険性を理解し

そんな世界に美樹と鹿目の2人を引きずり込もうとした事に罪悪感を感じたのか

どちらにせよ魔法少女を続けるのはもう嫌だ

と言う事みたいだ

そんな訳なので球磨川先輩に契約を無かった事にして貰った

既に事故から数年が経っている

今更契約を無かった事にしても事故の怪我がぶり返すなんて事は無いだろう

あっても、どうせ無かった事にしたのだろう

「巴マミ、脱落っと・・・」

あれから巴は死んだ魚のような目をしている

やる事を失った為か

一度死んだ為か

僕にはもう関係ない

当然、鹿目と美樹も指導してくれる人が居なくなったのでもう魔法少女をやる気は無いらしい

志布志ちゃんも元々暇つぶしでついてきてただけなので最初から魔法少女なんてファンシーな物やるつもりは無い

結果

仕事が増えました☆

「キュゥべえ。誰か新しい魔法少女派遣してくれよ」

「佐倉杏子って魔法少女を呼んだから大丈夫だよ」

「なんだそれなら安心だ」

「彼女はかなり好戦的だけどね」

「それって僕も狙われたりする？」

「縄張り争いって事で殺られるかもね」

「なんてこった」

ところでさっきからキュゥべえの口調が心なしか怒っているように聞こえるんだけど

気のせいかい？

「君のせいでせっかくのエネルギー源が1人無駄に減ったからね」

「僕のせいじゃなくて球磨川先輩のせいだよ。僕は悪くない。僕は無実だよ」

「君は辞めたりしないよね」

「いざとなったら押し付けるよ。誰かに穢れも力もソウルジェムも」

不慮の事故なら可能だろう

「ハァ・・・君たちのせいで色々と台無しだよ・・・」

「そう、じゃあ死んでくれない？」

「意味が分からｎ・・・」

釘を顔面に打ち込む

１２本

「理由も意味もないよ。ただの暇つぶし」

あーあ、ベッドが血で汚れちゃったよ

キュゥべえどうしてくれるんだ？

「どうもこうも自業自得だろ？」

「そんな言葉は過負荷には無いんで」

もう一度キュゥべえを殺す

さっきの死体と一緒にその死体を窓から放り捨てた

暁美ほむらに直撃した

「・・・・・・・・」

血塗れの暁美（キュゥべえの血）がなんか睨んでくる

「ゴメン。ミスミス」

とりあえず家に上がらせた

シャワーを浴びキュゥべえの血を洗い流してきた暁美が貸した僕の服を着て戻ってきた

「全く・・・なんでここはこんなに滅茶苦茶なのよ・・・」

暁美がぼやくのは不満

「滅茶苦茶って言うのは？」

「あの学校の生徒」

「それは僕も含まれてたり？」

「当然じゃない」

暁美は平然と言い放つ

まぁ確かに

あの学校は滅茶苦茶なのが多いけど

完璧超人黒神めだかしかり

改造人間古賀いたみしかり

大嘘憑きの球磨川禊しかり

都城王都しかり

宗像しかり

「まぁ色々な奴が居るよ。あそこは」

「・・・」

暁美は何か呟くが僕には聞こえなかった

まぁいいや

「あ、そうだ。3年の宗像って言うのには気を付けてね？あの人って殺人衝動とか持ってるから」

「・・・・・・・・・・・」

うわぁ・・・なんか絶望したような顔してる

「まぁあの人はちゃんと自制してるけど」

異常に強い殺人衝動を押さえるのは簡単ではない

それが出来るのが異常である

過負荷とは違う

殺人衝動の宗像が過負荷にならないのは人を殺すことに怯えているからだ

宗像はどんな理由があっても殺す

でも今まで殺した事は無い

だって人は

殺せば死んでしまうから

「また話がずれた・・・」

話をずらすのが癖なのだろうか僕は

少し思考に入ると話がずれている

思考が最初は割り箸だったのに気がつくと爆弾になってた事もあった

これは僕の悪い癖だろう

「大丈夫だよ転校生、僕のクラスには僕と不知火以外は変な奴居な

いから」

「あの人同じクラスだったの！？」

「面識アリ？」

「この間・・・嵌められたわ」

「そう言う奴なんだ」

グダグダな会話を続ける

何時の間に過負荷の僕はここまで普通に話せるようになったのだろう

まぁ深く気にしたら負けだろう

ちなみに今知ったことだけど

暁美はどうやら僕の隣の席らしい

おまけ・・・と言うか最早こっちが本編っぽい

つー事で今回は2本立て扱い

2本目は「ほむほむと蝶ヶ崎かなめ」※ただの三人称ｖｅｒｓｉｏｎ

あまり変わらないよ?地の文以外

ようやくこの奇人変人そろいの世界にも慣れてきて

そろそろ暁美ほむらは鹿目まどかの監視に戻ろうかと思っていた

「病院坂さんの意見って結構ためになるわね」

なんて最近思えてきたところである

当然、あまり過信しすぎてはいけないのだが

病院坂さんと話してるせいでクラスから孤立しかけている事に気がついて居ない暁美ほむらである

「ん?」

上から水が飛び散るような音と何かが刺さる音が同時に聞こえる

「何の音・・・？」

上を向いた途端

ビシャリと白い毛皮と赤い肉と血が顔面に降ってきた

恐らく個体数は２つ

ただしぐちゃぐちゃにされて既に３つ４つぐらいにはなっている

元の個体数は２つだろうと言うことだ

「ひっ・・・」

一瞬悲鳴を上げそうになった

「これって・・・インキュベーダー？」

顔面はぐちゃぐちゃでただのアルビノの狐にも見えるけれど後ろを見れば一目瞭然だった

２つ、という事は２匹、その場で殺したのだろう

殺して、新しく来たのをすぐ殺す

こんな事をしそうな魔法少女は一人しか思いつかない

上を見れば予想通り、蝶ヶ崎かなめが窓から手を振っていた

「・・・・・・」

「ゴメンゴメン。ミスミス」

ミスで済ませてたまるかこの野郎

それが今のほむらの心境だった

その後、上がらせて貰いシャワーを借りる

最初の方は怖がっていた彼女も最近では全く怖く無い

いや多少は怖い

それでもこの程度のやり取りなら平気で出来る程度になった

インキュベーダーよりはマシ

それがほむらの判断

実質的にはインキュベーダーなんかよりよっぽど性質が悪いであろう過負荷もそこまで表に出さなければ普通の人間に見えなくも無い

一応感情だってある

ただ、感情の爆発の原因を押し付けているから全く感情が無いように見えるだけ

感情が本当にないインキュベーダーよりはマシなのかもしれないと思った

思ってしまった

シャワー室から出て借りた服を着る

若干サイズが大きいが気にするほどでも無い

はずなのになぜかほむらは精神的に傷を負った

ちなみにサイズが大きくて若干合わないと言う部分は胸の部分である

察してあげてください

「全く・・・なんでこんなに滅茶苦茶なのよココは」

ショックのあまりに今までのストレスが蘇った

ハッキリいえばまだ完全になれた訳ではなく

今日も帰りに妙な人間に遭遇したのだが

ちなみに名前は喜界島もがなである

生徒会会計

「滅茶苦茶って言うのは？」

蝶ヶ崎かなめがほむらに問う

「あの学校の生徒」

散々振り回された

「それは僕も含まれてたり？」

「当然じゃない」

むしろ二番目ぐらいに滅茶苦茶だと個人的に思う

1番は黒神めだかと球磨川禊

「まぁ色々な奴が居るよ。あそこは」

「本当・・・わけ分からないわこの時間軸は・・・」

ほむらは小さく呟く

その呟きは誰にも聞こえることも無く

「あ、そうだ。3年の宗像って言うのには気を付けてね？あの人って殺人衝動とか持ってるから」

殺人衝動って何・・・！？

ほむらは絶対に三年の教室には近づかないと決意した

そして思い出す

保健室の隣に3年の教室が並んでいる事を

途端にほむらは落ち込む

「まぁあの人はちゃんと自制してるけど」

そうなのかとほむらは少し安心した

「大丈夫だよ転校生、僕のクラスには僕と不知火以外は変な奴居ないから」

不知火っていうと・・・あの小さいのだったと思う

ほむらは思い出しそしてハッとする

「あの人同じクラスだったの！？」

「面識アリ？」

「この間・・・嵌められたわ」

嘘付き村の住人の件である

いつか仕返ししよう

そう心に決めたはずだ

「そう言う奴なんだ」

ちなみに後で知った話だと

彼女、蝶ヶ崎かなめはほむらと隣の席、と言う事を知らなかったそ

うだ

それだけ他人に関心が無い

「区別はクラス替えで差別は迫害」「過負荷？当然区別さ。人と人外はちゃんと

そろそろ佐倉杏子が登場します

多分

巴マミ、社会的にも肉体的にも死んでませんが精神的に死にました

て事で恐らくクライマックスまでは出番無しと思われます

それではまた次回～

「キュゥべえ３９号改めキュゥべえ４３号」「何体殺してるのよあなた・・・」

序盤はスルーしてくれて結構です（笑）

今回ようやく彼女が登場ッッ！

かなめ「なんでジョジョ風？」

なんとなく

「キュゥべえ３９号改めキュゥべえ４３号」「何体殺してるのよあなた・・・」

登校風景

そこにいるのは僕と志布志ちゃんと暁美ほむら

何時の間にやら過負荷に仲間入りである

「一緒にしないでよ」

「一緒にするつもりは無いけどね」

過負荷と普通は全く違うだろう

前回も言った通り過負荷は差別の対象で僕はされる側だ

むしろこうやって普通に一緒に登校したりしている時点でおかしいのだ

結局昨日、暁美ほむらは僕の家に泊まった

暁美の話を聞いているうちに深夜になってしまったからさすがにあそこまで遅くなると不味いだろう

これでも中学生である

そんな訳で結局家に泊まった

「眠い・・・」

暁美は別の時間軸から来たらしい

魔法少女になる際に願った事は「鹿目まどかとの出会いをやり直したい」

と言う事らしく、鹿目まどかが死んだ事を受け入れられなかったからもう一度やり直す為にこうしてやって来たそうで

その内に暁美は魔女の秘密や魔法少女の秘密を知ったと

それも余すところなく僕に教えてくれた

ただ、僕はその辺の魔法少女事情に関してはとっくに聞いていたから2度目の説明は退屈な物でしかなかった

今日授業サボろうかな・・・

「あ」

「どしたの？」

「ん、なんでもない」

「んだよそれ」

前方、美樹さやか及び鹿目まどかの姿を確認

まぁもう関わろうとするとは思えないけど

『話しかけなくていいの？』

『話しかける理由が何処にあるんだ？』

僕はもう関係者じゃありません

魔法少女にならないのなら接点も無いだろうし

僕も辞めようかな

まぁでもワルプ・・・ワ・・・まぁあのなんとかの夜とかを倒すまでは付き合ってやるか

暇だし

授業中

『だからジャンプ読むなぁあぁあぁあああああああああ』

関わってくるとは思っても見なかった

普通思わないよね

普通じゃないけど

とりあえず何時の間にか机に座っているキュゥべえをまだ先生の来ないうちに廊下に出て釘を刺し外に捨てる

更に落下していくキュゥべえに釘を刺していく

ぐちゃぐちゃの肉塊になったキュゥべえは地面に叩き付けられ後からやって来た新キュゥべえ３９号によって捕食された

『３９号って・・・』

暁美が呆れた声を出すが（実際には声じゃなくてテレパスィー）僕はそれを聞かなかった事にした

ちなみに３９号と言う事はつまり僕は今まで３８体のキュゥべえを殺したということである

数え始めたのは結構最近なのでもしかするともっと多い可能性が

「４２体だよ。かなめ」

「はいもう一回ゴー」

キュゥべえ３９号、改め４３号を再び窓の外に投げ金槌で地面に沈める

通行人が突然出来たクレーターに驚いていた

キュゥべえの肉片が見えるのは僕だけである

４４号によってキュゥべえの死体は処理された

「フゥ（やり切った顔）」

『あなたの武器って釘じゃなかったかしら？』

『釘を打ち付けるには金槌が必要だろう？当然、間違えて刺した場合には釘抜きが必要さ』

『つまりあなたの武器は釘と金槌と釘抜きって訳ね』

『残念、プラス鋸だ』

まぁ鋸と釘抜きと金槌はほとんど使わないんだけど

つか今の所使った事は無い

ホコリ被ってます

『さーて、今度でてきた時は解体作業に移ろうか』

『解体って・・・』

『殺して（金槌で）解体して（鋸で）並べて（釘で）揃えて（釘抜きで微修正して）晒してやるさ（素質ある人の前に）』

『括弧内に不穏な文字が見えた気がするのは気のせいかしら?』

『さーてね』

僕はしらばっくれる

そしてその後現れたキュゥべえを金槌で殺して鋸で解体して釘で並べて釘抜きで間違えて打ちつけた部分を直し素質ある人間の前に晒す

ちなみにその素質ある人間と言うのは町の通行人の誰かである

鹿目の前に晒すと気絶しそうなので止めて置く

「ちなみにこの殺して解体して並べて揃えて晒してやるさって言葉さ、知り合いの殺人鬼のきめ台詞なんだよね」

「まだ変なのがいるの・・・？」

もうウンザリだとでも言うかのように暁美はガックリと肩を落とす

変なのが多いと言うのには同意する

「その殺人鬼って前に言ってた宗像って人？」

「いや、零崎」

「ああ、哀川潤さんが探してた人ね・・・」

殺人鬼なんて探してどういうつもりなのかしらと暁美は呟く

「その哀川さんに人殺しは今禁止されてるからね零崎は、ちなみに破ったら殺されるらしい」

「ああ、そう。それで安心出来るとでも？」

「出来ないよね～」

相変わらずグダグダな会話

志布志ちゃんは今日は一緒に帰れないらしい

生徒会に仕事を手伝ってくれと頼まれたとかなんとか

仕事と言うのがどういう物かは知らないけれど

「まぁ零崎はこの町には居ないだろうから」

「どうかしら・・・」

しばらく歩くと突然、辺りがピカソな空間に変わった

魔女の登場か

面倒くさい

「いえ、これは使い魔ね」

「なんだ使い魔か」

とりあえず僕に害を与えるつもりなら容赦しないけど

こっちに向かって攻撃をしてくる使い魔を釘で刺す

当たった攻撃は別の使い魔に押し付けた

殺して殺して殺して殺して壊して壊して壊して壊す

後少しで使い魔を殲滅出来ると言うところで
邪魔された
見知らぬ赤髪の魔法少女っぽい人に
「ちょっとちょっとー何やってんのさアンタ」
ちなみに何時の間にか暁美はどっか消えた
「誰？邪魔しないでくれない？」
「あれ使い魔だよ？グリーフシード持ってる訳無いじゃん」
「そうですね」
「いや何その適当な返事？おちょくってんの？」
「そうですね」
「おちょくってんのかよ」
「そうですね」
「いいともかっ！？」
「そうですね」
「よし殺す。絶対殺す。だからそこ動くな」

「・・・」

「そうですねって言えよ！」

「そうですね」

「あーもうウザったい！」

キレながら槍で僕を攻撃して来た

釘で防ぐ

「？、なにそれ、武器？」

「そうですね」

「いい加減やめろそれ」

「だが断る」

「今度はジョジョか・・・ったく、飽きた」

「そうですか。だが断る」

釘で囲う

「何のつもりだ？」

「さぁてね」

「やりあおうってのか？」

「ご自由に解釈してよ。まぁ僕は真面目にやる気も適当にやる気もないけど」

「・・・ッ！」

あ、怒った

槍を使って切ったり刺したり

ダメージを電線に押し付ける

すると電線が切れ先端がそのまま赤髪魔法少女に向かって行く

「うわっ！てめぇ何しやがった！」

「おいおい僕のせいかい？不慮の事故じゃないか」

「うるさい！」

また槍を使い攻撃してきた

そのダメージを今度は別のものに押し付ける

例えば、ここは路地裏だから、この魔法少女の真上の窓

パリンとガラスが砕け落下したガラスが彼女の体を切り刻む

僕にも多少落ちてきたけどそのダメージは彼女に押し付けた

「ぐ、あああああ！」

「古くなってたのかなあのガラス」

「ざっけんな！お前が何かしたんじゃねぇのか！？」

「そーかもね」

僕は別に何もしていない

ただダメージを適当に押し付けてるだけだ

「でもやったのは君さ。僕は押し付けただけ」

「押し付けた・・・？」

「詳細はＷｅｂで」

金槌を振り下ろし赤髪魔法少女の頭を殴る

そのまま彼女は意識を失った

「あー生きてるかなコレ。未成年のうちに人殺しとかついてないわ～」

暁美が居たらもうちょい楽だったのに・・・何時の間にか消えよって

今度あったら説教が必要だ

彼女の頭の周りには血溜が出来ていた

その血溜は時間が経つにつれて大きくなっていく

じわりじわり

「まぁ魔法少女なら死なないよね。そもそも魂の場所が違うんだから。勝手に修復されるだろ」

倒れている魔法少女を放置して僕は路地裏から出た

「キュゥべえ３９号改めキュゥべえ４３号」「何体殺してるのよあなた・・・」

と言う訳で佐倉杏子の登場でした～

「ちわ、やっぱ生きてたね。良かった良かった」「良くねーよ！！」（前書き）

今回ちょっと短いです

連続更新と言う事で見逃してください

「ちわ、やっぱ生きてたね。良かった良かった」「良くねーよ!!」

「ちわ、やっぱ生きてたね。良かった良かった」

「良くねーよ!!」

目の前でダンスダンスレボ○ューションをやっているのは今日の夕方僕が金槌で半殺しにした魔法少女

名前は佐倉杏子

「でも良かったねぇ結構重症っぽく見えたのに夜には治るなんてさすがはベテラン魔法少女」

「・・・なんの用だ」

無視かいな

「僕は特に無いよ?あるのはこっち」

言って僕が前に出したのは暁美ほむら

どうやら佐倉杏子に用があるらしい

「それと僕が使い魔も倒しているのはあくまで暇つぶしだから。邪魔をするようなら暇つぶしの一環で君も殺すからね☆」

今までで一番の営業スマイルを浮かべながら言う

「・・・・」

冷や汗をかく佐倉を見て僕は笑いながらゲーセンを出た

「さて、脅しは十分っと」

コレで僕を挑発するような真似はしないだろう

そういえば美樹さやかが魔法少女になる的な話を暁美から聞いてた

のに今のとこその話は無いな

現時点ではまだなっていないはず

まぁ上条恭助とかいう少年がらみの願いだったらしいから、もしかするととっくにどうにかなってるのかもしれない

僕は深く考えず自宅に向かって歩く

町は既に暗く女子中学生がたった一人で歩くのはどうかと思われるが僕はそんな事気にしない派なので問題ない

いや本当はありまくりなんだけどね

「む？」

再び辺りがピカソ空間に

今度は魔女っぽい

「最近エンカウント率高いな・・・」

『エンカウント率って・・・ドラクエじゃあるまいし』

「はいはいキュゥべえ４５号は黙ってなさい」

『正確には４９号だよ。殺した数ぐらい覚えといてよ』

「そうかーそんな事はどうでもいい」

釘で使い魔を張り付けにしながら先に進む

扉を蹴破り入った先にはケタケタ笑う気味の悪いでかい女の姿をした変な魔女

『トランプ使って戦いそうな顔してるなぁお前』

開口一番魔女が言ってきた言葉

魔女も喋るのかーとかコミュニケーション取れるんだなぁとか君の戦い方は？とか気持ち悪い顔してるねとかでかいねとか変だねとかケタケタ笑ってるねとか何その髪型とか服とか周りに浮かんでる杖とか使い魔とか変なのとかそんな事はどうでもいい

とりあえずこいつ、殺戮決定

「なんでそこまで人を的確に傷つけられる台詞が言えるんだよたかが魔女によォ・・・二次元と三次元の違いぐらい分かっとけよ。この世界は二次元ですらないけどさァ小説だけどさぁ。ムカついた。メタ発言が出ちまったこともそうだけどまずお前に対してムカついた。魔法少女だったからって容赦しない。今までは釘しか使わなかったけど今回は鋸、金槌、釘、釘抜き全て使ってお前を殺す。殺してやるよテメェはよぉ。呪いなんて残す暇も与えない。肉槐も肉片も眼球も内臓も皮膚も細胞も髪の毛もグリーフシードも何もかもミクロ単位の欠片一粒残さず完膚無きまでに消し去って殺す。完全に殺す。殺して殺して殺して壊して壊して殺して殺しつくしてやる。『覚悟』はいいか？『準備』は？『武器の貯蔵』は十分か？『呪いをかける準備』は？させねーよ。『準備』？『覚悟』？『武器の貯蔵』？なんだそれ『無限の剣製』の準備もさせない。殺す。お前は殺す。おいおいまだ『４９回』しか金槌で殴ってねーぞ？まだ『解

体する作業』が終わってねーんだよ勝手にくだばんな。あと何回殴ろうか？オイオイ解体終わったけどまだ消えちゃ駄目だぜェ？さぁさぁお待ちかねの作業、次は『釘を刺す』けど痛かったら言ってねー？もぉおっと痛くしてあげるからさぁフフフ、アハ、ハハハハハハハハハハハハ、アハハハハハハハハ！」

フゥ・・・

一息ついたら魔女は既に消え去り呪いの欠片も残さず消えた

つまり

「グリーフシードもありません。まぁどうでもいいさ。あースっキリした」

上記の文字が読みづらかろうが知った事じゃ無い

それは僕の責任ではなく作者の都合である

ストレスを解消してめちゃくちゃスッキリしてた所に

「お前さぁ。グリーフシードも一緒に消してどーすんだよ」

何時の間にか佐倉が居た

「好きでやったんじゃ無いよ。勝手に消えたんだ」

「やりすぎただけだろうが！つーかやりすぎてグリーフシードが出なくなるなんて初めて聞いたぞ！？あれってどう見ても魔女だったしッ！なんでグリーフシードが出ないんだよ！？つか怖いよお前！

？トランプ使いそうって言っただけで、あごめんなさいもう二度と言いません！！」

トランプ使いそうという単語に反応してしまった

おそらくその後の土下座による謝罪が無かったら再生が困難どころか不可能になるぐらいに彼女はぐちゃぐちゃになっていただろう

「運がよかったね。僕の機嫌が悪かったらただのひき肉がゴミ箱に捨てられているだけって扱いに君はなっていたと思うよ？」

「は、はは・・・」

乾いた笑いを浮かべる佐倉

ちなみに僕が言った言葉、これを訳すとつまり『人間とは判別出来なくなるぐらいにぐちゃぐちゃのミンチになってゴミ箱に捨てられていたと思うよ？』である

「それじゃ僕は帰るね。夜遅いから佐倉も気を付けなよ」

「お、おう」

翌日

美樹さやかが魔法少女になったそうです

いやぁ予想外だね

巴のあんな死に様を見てなおなろうと考えるなんてさ

球磨川禊がいなかったらあの形のまま死んでたんだよ？

それを分かっててなお魔法少女になろうなんてさ

よっぽど叶えたい願いがあったんだねぇ

やっほおおおおおう！仕事が減るぜえええええええええ！（本音）

ゴホン、とりあえず今日はこの辺でお開きですよっと

「ちわ、やっぱ生きてたね。良かった良かった」「良くねーよ！！」（後書き）

過負荷、全開ッ！

てことでかなめ大暴走でした

魔女って喋るの？とかなんでその台詞？とかそういうツッコミはスルーでお願いします

ちなみにかなめの切れた時の台詞は序盤のみめだかボックス原作の所から取っております

あと地味にＦａｔｅネタが入ってるのは気にしないでください

『』は読みづらかったで入れました

それではまた次回～

「眠い～～～～～」（前書き）

今回も蛇足ッッ！

すみません本編にうまく絡ませられないんです

あと最近過負荷とかめだかメンバーが出番減っている気が・・・

「眠い～～～～～」

路地裏にて美樹さやかと佐倉杏子が戦闘中

それをビルの屋上から眺めている僕

「素人にしてはやるね美樹って」

『介入しないのかい？』

『もう少し後。美樹にはこの世界の厳しさを覚えてもらいたいし』

まぁコレで分からないのなら

もう魔女化する以外に道は無い訳だけど

あ、切られた

血が噴出し美樹さやかは路地に倒れた

あれ死んだんじゃね？

あ、起き上がった

どうやら誰かを助けるという願いをした為に回復力が他の魔法少女よりも上がっているらしい

回復力だけならトップだろう

ちなみに僕は能力的には最弱だそうです
不慮の事故という欠点のおかげで生き残っているに等しいそうだ
あと過負荷ならではの躊躇いの無さ
容赦の無さ

その辺が僕がある程度戦えている理由だそうだ

キュゥべえ曰く

不慮の事故は本来なら欠点にしかならないけれど使い方次第では役に立つ
江迎ちゃんの全てを腐らせる手が枯れた木を蘇らせたり納豆や味噌を作れたりとプラス方面にも使えるように
志布志ちゃんの致死武器も使い方次第だろう

「昔はこんなこと考えなかったんだけど・・・」

やっぱり黒神達にあってから僅かとはいえ変わったらしい
少なくともクラスの半分以上が登校拒否、という事は無くなった
昔はそうだった
嫌な事思い出した

腹いせにちょっと介入しよう

ビルの上から飛び降り着地する

足に来たダメージは全てキュゥべえに押し付けて

同時に鹿目に何か言おうとしていたキュゥべえの体が爆ぜた

あの小さな体では僕に来た負荷を全て担う事は出来なかったようだ

すぐに52号がやって来たが

『君に殺されたのは52回じゃなくて64回だからね？』

『そうか。細かい事は気にしちゃ駄目だよ』

『細かく無いよ・・・』

「やぁ佐倉杏子、魔法少女の役割は一応魔女狩りだったはずだけど、何で魔法少女を狩ってるのかな。僕の仕事が増えるじゃないか」

「それが理由かい！！」

美樹がツッコミを入れる

「それが理由だッ！」

僕は断言する

「・・・・」

佐倉は冷や汗を浮かべながら僕の方を見る

と言うか固まってるね

「僕はそこまで君に怯えられるような事をした覚えは無いんだけど」

「したよ!?いっぱいしたよ!?」

らしく無い叫びを僕に向かって叫んでくる佐倉

「したっけ」

「したよ!機嫌が悪かったらミンチにするって言ってきたよお前!」

「失敬な。僕は単に人間と判別出来なくなるぐらいのペーストにしてやろうか的な事をオブラートに包んで言っただけじゃないか」

「もっと酷いじゃねーか!!」

さっきまでのシリアスな雰囲気は何処に

ボケとツッコミが飛び交っていた

「あんた何したのよ・・・」

「佐倉の前で魔女を倒しただけだけど」

「それだけ?」

「ちょっと魔女に酷い事言われて切れた所だった」

「ああ・・・」

一応美樹も僕が切れた所を見た事はある

少し前に起きた日之影空洞が知られざる英雄を失った時に僕はその状態で彼と戦った

その時日之影の応援としてギャラリーがたくさんいたけど

そこに彼女もいたのだろうか

僕は佐倉に向き直った

「ひっ・・・」

ビビられた

どうやらトラウマとして染み付いているようだ

「とりあえずさぁ。今日は引いてくれない？機嫌悪いんだよ僕」

途端、佐倉は視界から消えた

逃げたな

「やばいやばいそれ以上やったら切れる！捻じ切れる！！」

「捻じ切れないわよ」

現在、暁美ほむらに虐められております

「人聞きの悪い事言わないで」

なぜだか今日もやって来た暁美、そしてなぜか佐倉が僕の肩を掴み捻っている

ヨガだかなんだか知らないけどとりあえず痛いっす

なので痛みを見知らぬ通行人に押し付けた

外から悲鳴が聞こえる

「何、他人に、痛みを、押し付けてるのよ！」

「いや切れるってだから。マジで」

痛みの感じなくなった肩を暁美が捻じ切ろうと余計に力を入れた

このままだと本当に捻じ切れる

僕のステータスに再生能力というものは無い

そんな訳なので大怪我してもソウルジェムが無事な限り大丈夫

と言うことにはならないのである

ただしソウルジェムが無事な限り死にはしないのでハッキリいえば

生き地獄

まぁそもそも外傷を他人に押し付ければ問題ないんだけど

その代わりに自分に殺人犯のレッテルが貼られるのは後々面倒だから嫌だ

少年刑務所に入ったら勉強ばっかだろう？

僕は勉強は苦手なんだよ

「やっぱり願いぐらい真面目に考えれば良かった」

「お前どんな願い叶えたんだよ・・・」

「とある人物の呪殺。当然その人は生きてました。僕の願いはなかった事になった訳」

「うわ、お前やっぱイカれてるな」

「分かってるなら関わらなければいい」

それとイカれているのではなく終わっているのだ

ここ重要

「そう言う訳にも行かないだろ。もうすぐワルプルギスの夜が来るとか何とかでコイツに呼ばれたんだから」

「それでなんで僕の家な訳?そしてなぜ僕は暁美によって拷問ストレッチをさせられているのか２００文字以内で答えてくれ」

「無理」

なんてこった

その痛みを伴う拷問（暁美曰くマッサージ）は１時間続いた

地味に痛む肩をさすりながら僕は2人と向き合う

途中一般人ではなく佐倉に痛みを押し付けたらドロップキックが飛んできた

そのドロップキックを暁美に押し付けたらどうなったか

大☆乱☆闘

スマブラみたいな

当然、魔法少女の力全開でだ

ちなみに勝者は暁美

僕は途中から傍観してた

そんな訳で1時間続いたストレッチの後4時間に渡って続いた乱闘のせいで現在時刻は深夜3時を過ぎていた

明日は学校、朝6時30分起きである

部屋の中の片付けが面倒になりそうだ

「ふぁ～・・・」

「コクリコクリ」

「ＺＺＺ・・・」

当然、ワルプルギスの夜討伐の作戦会議的な物なんて出来る訳も無く

寝まいと頑張っている内に気が付けば朝になっていた

「じゃ、僕今日学校サボるから」

「駄目よ」

僕も暁美も目に隈を浮かべている

佐倉は一度自分の家に帰った

学校には通っていないらしい

つまり

寝放題

「呪い殺してやろうか・・・」

「怖い事考えてるんじゃないわよ」

「隈浮かべながらも随分気丈だなァテメェは」

「口調変わって無い・・・？」

「おっと、気のせい気のせい」

本当は気のせいじゃ無いんだけど

ちなみにトランプ使いそうと言う台詞は禁句です

「ハァ・・・」

「溜息つきながら釘を出すな金槌を出すな鋸を出すな釘抜きを出すな！」

暁美のツッコミが飛んでくる

当初のキャラはクールでミステリアスだったのに何時の間にかツッコミドS少女に変わってるような気がする

気のせいだとは思わない

思う気も無い

ああ、それにしても、死ぬほど眠いな

とりあえず眠気を暁美に押し付けた

ドロップキックを喰らった

「痛い・・・いいじゃん別に。時間止めれば暁美は寝放題なんだから」

隈が無くなりスッキリした顔で僕は言う

痛みもついでに何処かの誰かに押し付けて

「ハッ！その手があった」

代わりに目が半分死んでいて隈も凄い事になっていて今にも倒れそ

うな暁美は今気づいたとでも言うような反応を見せる
そんな事出来るのかどうかは知らないが反応からして出来るらしい
「・・・って、それは出来ないわ。魔法が使えるのは意識がある間だけよ」
駄目だった
「ふぁ～・・・」
欠伸をしながら学校へ向かう暁美
その後を追う僕
そして途中で暁美が電柱にぶつかったりカラスを踏みつけたりキュゥべえを無視したり（単純に上の空だけだったのかもしれないけど）踏みつけたり寝ぼけて僕を銃で撃ったり（暁美のブラのホックに押し付けた。ちなみに気が付かなかった）気が付いて僕にドロップキックを食らわせそのまま地面に落下したり
学校までの道のり、暁美はフラフラでものすごく面白かった
「ど、どうしたのほむらちゃん!?」
「ま、まどか・・・？」
「ああ、タダの寝不足だから気にしないでいいよ」
「寝不足・・・？」

「うん」

僕も寝不足だけど眠気は全て押し付けたのでものすごく目が覚めている

その分暁美は眠気が余計に強い

ちょっと肩を叩いたら倒れそうだ

「保健室行った方がいいんじゃ・・・ああでもあそこには病院坂さんが・・・あ～でもほむらちゃんいつも行ってるし・・・」

「大丈・・・夫・・・」

そう呟いて美樹に倒れ込む暁美

「ハハハハハハハハハハ」

それを見て爆笑する僕

ちなみに寝てしまった暁美は保健室に運んでおいた

起きたのは夜の9時だったそうだ

「眠い～～～～～」（後書き）

早くもグダグダになり始めてきました

気を付けないと終わらない・・・

「正義の味方ごっこ」（前書き）

今回は珍しく黒神の出番

原作から剥離しています

現在軌道修正中（笑）

あと2，3話でどうにかなりそうだ

「正義の味方ごっこ」

「『魔法少女は正義の味方ごっこを本物の正義だと勘違いしてるんだよ』」

そんな事は分かっている

球磨川先輩の言葉を僕は肯定しない

でも否定しない

僕は魔法少女が正義なんて思ってない

他の魔法少女がやっている事が正義の味方ではなく正義の味方ごっこだと言う事も分かる

でも球磨川先輩の言い方だと僕も正義の味方ごっこをして悦に浸っている奴と言われているようで嫌だったので

「『イタッ！痛い痛い！』」

無言で金槌で殴った

ぽかぽかなんて軽い物ではなく

ぐしゃぐしゃと生々しい音が響く

「『僕じゃなかったら死んでるよ』」

「殺すつもりで殴ったんですけどねぇ」

金槌を仕舞う

そういえば

「生徒会の仕事の方はいいんですか？」

現在時刻、放課後

「『あ、そうだった』」

言いながら球磨川先輩副会長は教室を出、生徒会室へ向かう

その後姿を見送りながら僕はかばんを持ち下校する

「久々に志布志ちゃん辺りでも魔女狩りに呼んでみるか・・・」

黒神とか呼んだら来そうだな～なんて事を考えながら僕は志布志ちゃんを誘って魔女狩りに向かう

「で、なんで場所が生徒会室なわけ？」

「さぁ？てかなんで美樹が居るの」

「魔女の反応があったからに決まってるでしょ」

ちなみに志布志ちゃんは今日休みだった

また風邪を引いたそうな

「うーんでも生徒会室なら大丈夫そうだな・・・」

「だろうね。でも一応入ったほうがいいと思う」

「そうか？」

「これは生徒会の仕事じゃなくて私達の仕事だから」

そう言って美樹は魔女の居る生徒会室に突入した

それにしても最近本当に魔女のエンカウント率が高いような

インフレ突入？

グリーフシードのバーゲンセールだぜ！

冗談はここまでにして僕も生徒会室に突入した

「む、美樹二年生。それに蝶ヶ崎二年生」

「相変わらずだね黒神は」

「貴様も相変わらずのようだな」

不敵な笑みを浮かべながら言う黒神

「とりあえず避難した方がいいと思うよ。黒神や球磨川先輩はともかく人吉や喜界島は人間ならともかく、化物とは戦えないでしょ？」

「悪いが蝶ヶ崎二年生。学校で起きた問題は私たち生徒会の仕事だ」

「悪いけど黒神。魔女の類の事に関しては僕たち魔法少女の仕事だ」

お互い引かない

いや、人吉と喜界島と阿久根は引いた

魔法少女発言が原因だろうと思う

とりあえず恥ずかしさは美樹に押し付けた

「引かないようだな」

「いや。引くよ。僕はね。美樹はどうだか知らないけど」

役目も美樹に押し付ける

黒神達がどうするかは知らないけど哀川さんが魔女を簡単に倒せたのだから彼女に及ばずとも遠からずな実力を持つ黒神ならどうにで

もなるはずだ

球磨川先輩に至っては魔女そのものを無かった事に出来るだろうし

人吉や喜界島、それと阿久根は恐らく化物とは戦えない

いや阿久根なら分からないけど

破壊臣って言われてたくらいだし

僕は結界に取り込まれた生徒会室を出ようとして

肩を掴まれた

「自分の役目ぐらいちゃんとやりなさい」

と言うのは美樹

「いや、あいつらでも十分どうにでもなるレベルの魔女だと思う」

「問答無用」

そのまま引きずられる僕

向かう先は結界の最深部

横に並んで歩くのは生徒会メンバー

総勢7人、内2人魔法少女、3人異常という豪華なメンバー

途中現れる使い魔は僕や美樹に殺される前に逃げていく

黒神が怖いのだろうか

自分より格上というのはただの使い魔でも分かるらしい

人格も意思も無かったはずの使い魔も本能的に黒神めだかという存在に恐怖するのだろうか

「ねぇかなめ。さっきから使い魔が逃げていくんだけど」

僕のせいじゃなくて黒神のせいだ

しばらく歩くと扉にたどり着く

美樹はさっさと変身した

「魔法少女ってさぁ・・・どうなの？」

「精神的に辛いよ。なんかいろんな意味で」

喜界島の問いに僕は答えながら僕も変身

僕のはキラキラではなくむしろどろどろといった感じ

魔女だろって言われるほどに

言ったのは人吉である

とりあえず殴っといた

扉を蹴り破ると中には3対の翼を生やした魔女が居た
周りには大小さまざまな球体が浮かんでいた
「んじゃ、いっちょ狩って・・・」
「待て、美樹二年生、蝶ヶ崎二年生」
魔女に向かおうとしたところで黒神に止められた
そういえばコイツって精神感応使えるんだっけ？
「アレは私が止める」
「な・・・！アンタ何いって・・・」
「そのままの意味だ。あれは倒す物じゃない」
黒神に睨まれた美樹は威圧され一歩後ろに下がる
黒神は魔女に向かって歩き出す
攻撃されてもペースを落とさずに真っ直ぐ
攻撃を喰らおうが骨を砕かれようが歩く
ただひたすらに魔女に向かって
ほんの数秒で魔女の元にたどり着く

魔女はもう攻撃を止めていた

「・・・大丈夫だ。もう呪わなくていい」

黒神は魔女にそう言った

とても優しい口調で

瞬間、世界が崩れた

「正義の味方ごっこ」（後書き）

めだかの口調とか微妙に違うような気がしないでもないですが注意書きに書いた通り別人なので問題は無いです

それではまた次回

「魔女の呪いでも解いたんじゃないかな」（前書き）

今回、新キャラ登場です

オリキャラです

めだかボックスに習って名字は地名になってます

「魔女の呪いでも解いたんじゃないかな」

結界が崩れ溶けていく

魔女の体が崩壊し使い魔が消滅する

周りに浮かんでいた球体もシャボン玉が破裂するように消えていった

「ちょっと、これどうなってるの!?あの生徒会長何したの!?」

「さぁてね。魔女の呪いでも解いたんじゃないかな」

黒神はやっぱり化物だった

優しすぎて人間らしくない化物

「ハァ・・・僕はこんな事考える奴じゃ無かったんだけど・・・」

ちなみに生徒会メンバーは黙ってこの光景を見ている

世界が崩壊し光に染まる

そして元の生徒会室へ

そこでは見滝原中学校の制服を来た少女が黒神に抱えられて眠っていた

手にはソウルジェムが1つ

穢れの無いソウルジェムがあった

間違えた

穢れの無くなったソウルジェムがあった

「美樹二年生」

「は、はい！？」

「この子を保健室に運んでやってくれ」

「あ、わ、分かりました！」

美樹は変身を解き少女を抱えて保健室に向かう

「これはどういう事だ。蝶ヶ崎二年生」

「・・・さぁね。そういうのは僕じゃなくて暁美ほむらの方が詳しいと思うよ」

「暁美って・・・転校生の？」

喜界島が聞いてくる

ああ、そう言えば同じクラスだったね君

忘れてたよ

ちなみに阿久根は隣のクラスである

「そうか・・・」

呟く黒神の顔は少し怖かった

「・・・という事があったんだ」

今日起きた出来事を暁美に説明する僕

「魔女を魔法少女に戻したですって・・・？」

さすがの暁美も驚愕していた

穢れが溜まり魔女化した魔法少女はもう元には戻らない

それが黒神の一言で元に戻った

キュゥべえに言ったらどうなるかな

「ふぅん。興味深いね」

「グサグサっと」

やって来たキュゥべえに釘を１３４本と金槌１２０発をお見舞いする

そこには白い部分は欠片ほどにも残ってない赤い肉片だけが転がっていた

肉片と言うかもう液体になってる

ドロッドロ

「とりあえず処理しといて暁美」

「嫌よ。汚い物は出来る限り触りたくないの。どうせ新しいインキュベーターが食べて処理するわ」

「僕としては一分一秒もあそこにあって欲しく無いんだけど。それに今日来るとは限らないよ」

「来るわよどうせ。今までだってどんなに遅くても１２時間以内に来てたから」

「１２時間は長いって」

そんなやり取りをしていると何時の間にかキュゥべえが死んだキュゥべえの死体を喰っていた

とりあえず喰い終わったと同時に僕はキュゥべえを外に投げ釘で貫き窓を閉める

そして最後に窓に魔法で錠をする

「さて、話を戻そうか」

「ええ。それで、魔女が魔法少女に戻ったって言うのは本当なの？」

「うん。一応自分で見たし美樹も見てた。美樹はちょっとヤバいかもしれない。キュゥべえに対してものすごい怒りを感じてる」

「それは私も同じよ」

怒気を放つ

怖い怖い

「まぁ半分自暴自棄だ。早いうちに改善しないと魔女になるよアレ」

「いざとなったら殺したほうがいいかもしれないわね」

「容赦ないね君。もしかして美樹の事嫌い？」

「大嫌い」

どうやら嫌いだったようだ

まぁあいつはある程度不幸な人間からはとことん嫌われそうな性格してるからね

不幸面した幸せ者

それが美樹さやか

ついでに話を聞く限りじゃその幼馴染の上条恭介も僕の認識じゃそう言う部類だ

ある程度不幸と呼べるのは佐倉や暁美くらい

「不幸面した幸せ者ってのはやっぱり嫌われるものなんだね」

「それはいい得て妙ね。あなたやるわ」

「お褒めに預かり光栄ですよっと」

「褒めてないわ。貶してるのよ」

「君ってなんか声だけじゃなく性格まで戦場ヶ原さんに似てきたね」

前から戦場ヶ原さんと声似てると思ったけど性格まで似るとは

「誰よそれ」

「吸血鬼の彼女」

「訳が分からないわ・・・」

頭を抱える暁美

「それで、魔女になってた魔法少女って誰だったの?うちの生徒だったんでしょ?」

「塩見汐だってさ」

僕の周りって名字が地名になってる人が多いような気がする

それもかなりマイナーな地名

そう言う僕の名字も地名なんだけど

「彼女が願ったのはどうやら妹を生き返らせてって事だったみたい」

当然、死んだはずの人間がいきなり生き返れば騒ぎになる

その為に近所から叩かれ両親は自殺

結局、妹もそれに巻き込まれ

せめてキュゥべえが記憶の操作でもしてくれれば良かったのに
ただ生き返らせるだけじゃ何の意味も無いのに

「本当、キュゥべえももう少し考えてやってくれればいいのにね。
ご近所も普段は無関心な癖にそう言う時に限って無駄に関心示すん
だから性質が悪いよね」

「そう言う事を淡々と言えるあなたの方が性質悪いわ」

で、翌日

大体予想通りと言うか、美樹は学校に来なかった

代わりにやって来たのは塩見汐

ちなみに彼女は僕と同じクラスだったらしい

ちなみに一つ前

数週間前に行方不明になっていたらしく、今日復帰した

思春期の多感な時期に家出は珍しくない上に家庭事情が複雑な為、特に大きな問題にはなっていなかったらしい

まして異常者の集まりであるこの学校では家出程度では誰も動じない

ちなみに塩見はなんやかんやで黒神の家に住む事になったらしい

彼女はもう誰かを呪う事は無さそうだ

黒神にはもうひと仕事して貰おうかね

「魔女の呪いでも解いたんじゃないかな」（後書き）

魔女の呪いを解いてもそこにあるのはソウルジェムだけじゃね？って疑問はとりあえずスルーしてください

場合によっては安心院さんつかってどうにかします（笑）

それではまた次回～

「・・・分かんねぇよ」（前書き）

太刀洗さん早くも登場（笑）

まぁ名前だけですが

「・・・分かんねぇよ」

「ねぇ、あなたも、魔法少女なのよね」

僕の一つ前の席

今まで居なかった3つの空席の1つ

その内、一つは暁美で埋まり

もう一つは彼女、塩見汐で埋まった

僕は以外と嫌われて居なかったのかもしれない

それとも、生徒会戦挙を得て何かが変わったのかもしれない

ほんの数ヶ月前、春の始めごろの出来事

「・・・君は僕が過負荷だと知って話しかけているの？」

壊れてて終わってて腐ってて無価値で負完全な僕だと知っていて話しかけているのかい？

「いや、魔法少女だと知って話しかけているのよ」

彼女、塩見汐はそう答える

彼女も、魔女になったせいで、僕と同じになっていた

「なるほど、でも君はこっちに来ないほうがいいよ」

「どうして？」

「君はまだ間に合うだろう」

疑問形では言わない

僕は僕と同じ人間を増やしたいとは思わない

他人に迷惑を掛けるのはそんなに多く無くていい

「君ってさぁ、結構優しいよね」

「優しくないさ。とても残酷だ」

この世界で最も残酷なのは暴力や暴言などではなく無関心である

誰が言ったんだっけ

誰も言ってなかったんだっけ

誰か似たような事を言ったような気がする

まぁ創作なら創作でいいや

あながち間違っても居ない

暴力を振るわれるより、暴言を吐かれるより、無視されるほうが案外辛い物だ

無視はしないけど無関心な僕が言える事じゃないね

「君って面白いね」

「面白いんじゃない。無価値なんだよ」

過負荷同士の会話は破綻していた

何がとは言わないけど

翌日、美樹さやかが登校していた

精神的にはまだ辛いはずなんだけどね

まぁそれで呪いを振りまく存在になるのなら僕が遠慮なく消してあげるからさ

人を殺して人として終わる前に

だから安心しろよ

なんてちょっとクールな正義の味方っぽい事を言ってみるものの僕にそのキャラが似合わない事を理解している僕は即座に削除を実行した

まぁとりあえずコレも戯言として処理してしまおう

どっかにいる戯言遣い～押し付けてやるから出てこーい

当然、出てくるはずもなく僕はそのまま教室の机に突っ伏して寝た

美樹も疲れているのかよく分からないけど僕を止める事はしなかった

結局その日は一日寝て過ごした

いや、途中塩見に話しかけられたね

彼女が過負荷と知った瞬間だった

どうでもいい

「起きなさい」

隣の席から起こされた

そこに座るのは暁美ほむら

「うん～あと1年」

「長いわ。長すぎるわ。もう放課後よ」

「じゃああと2ヶ月でいいや」

「あんたね・・・太刀洗さんじゃあるまいし・・・」

「一日22時間も僕は寝れないよ」

「寝ようとしてたわよね。今完全に22時間どころか1400時間半ぐらい寝ようとしてたわよね」

「何の事やら」

しらばっくれてみた

そして再び深い眠りに

『『起きろおおお

昨日は徹夜だった

黒神が魔女を魔法少女に戻したという話をしたのがいけなかったのだろうか

暁美がものすごく生き生きしている

過負荷の僕にはキラキラした雰囲気は苦手なのだ

「グゥ・・・」

「さぁいくわよ。塩見さんもどう？」

「ワルプルギスの夜ってなんですか？でも面白そうなので行きます。でもその前にめだかさんに許可取ってきますねー」

そのまま塩見はダッシュで生徒会室へ

「魔力で幽波紋（スタンド）とか作れないかな」

「あなた・・・本当にジャンプ好きね」

「ぬるい友情、無駄な努力、むなしい勝利が僕の中の三本柱」

「最悪ねそれ」

「今は多少変わってるような変わって無いような。少なくともむなしい勝利って言うのは変わったね」

むなしくない敗北を経験してしまったから
むなしくない勝利をしている人を見てしまったから
ぬるくない友情を見てしまったから
無駄じゃない努力を見てしまったから
そしてそれが過負荷にできない事を知っているから
僕は今なおこの三本柱を立てている
崩れかけの三本柱
なんて

「戯言だね。コレも」

戯言遣いに押し付ける
今頃わけの分からない戯言がなぜ頭をめぐっているのか分からないというような状態になって居るのだろう京都の彼は
その様子を想像して軽く笑う

「あなたがそんな顔で笑うなんて珍しいわね」

「ちょっと京都の戯言遣いを思い出してね。僕は同じ過負荷には優しいんだよ」

戯言遣いは明らかにこっち側だろう

居るだけで周りを不幸にするあの体質は

「ふーん」

「無視？まぁいいけどね」

塩見ちゃんが戻ってきたところで家に向かう

また徹夜とかは勘弁

というか暁美さ、最近僕の家に居座りすぎじゃない？

夢を見た

場所は教室で目の前には黒い髪を後ろで束ねたカチューシャを付けた少女

―久しぶりですね安心院さん

―そうだね、ところで君に一つ聞きたい事があるんだ

―・・・なんですか

―君は本当に過負荷かい？

そこで僕は目を覚ます

「・・・分かんねぇよ」

僕は安心院さんの問いに投げやりにそう答えた

「・・・分かんねぇよ」（後書き）

やっと安心院さん出せたー

めっさ地味だけど

何時見た夢かというのは割愛

不定期開催ミニコーナー（？）

本編ボツ文章

暇なので「魔法少女に憧れるようになったのだッ！」という鹿目をジョジョっぽくしたイメージ映像を魔法少女の皆さんにテレパスで送信する

少し離れた席から吹き出す音が聞こえた

その後僕に向かって鹿目の鉄拳征栽が加えられた

温厚な鹿目が本気で暴力を振るったのはコレが最初で最後らしい

ジョジョネタですはい

ちょくちょくこう言うボツシーンは前書きに入れて行こうと思ってます

本当は結構前からやるつもりだったのに忘れてて結局今回になった

「干渉制限、それが私の過負荷よ」（前書き）

塩見に過負荷つける必要なかったかなぁ

まぁいいや

半分以上ノリで書いているため原作から剥離して先に進めるのが難しくなって四苦八苦してます

今回連続更新に望もうと思ってます

あと今回久々におまけつきです

「干渉制限、それが私の過負荷よ」

上条とやらが登校して来た

確か美樹の幼馴染だったはず

「まぁ僕には関係無いか」

漫画を読むと怒られるが小説ならば問題ない

が、僕は小説と言った類の物は持って居ない

寝たら起こされる

つまりやる事が無い

「ｚｚｚ．．．」

目の前でいびきをかいている塩見がねたましいですハイ

とりあえずその感情も押し付けついでに眠気を塩見に押し付ける

一層眠りが深くなったらしく髪を引っ張っても背中をつついてもビクともしない

ちなみに昨日は徹夜じゃなかった

暁美が思いのほか早く帰ってくれたためである

だけど嫌な夢を見たので気分は最悪である

なんでよりによって夢に安心院が出てくるのやら

僕の夢を勝手にジャックするのは止めてほしい

とりあえず机の上で丸まって可愛さアピールをしている（ように見える）キュゥべえの頭を掴んで潰し塩見の頭に乗せた

ついでにグッチャグチャにしてと

塩見の頭はキュゥべえの体液でグチョグチョである

基本的に見えずとも一部の方々からは見えるのでその一部の方々は引いていた

それでも起きない塩見は凄いと思う

「ヶ崎さん。面ァ貸してくれませんかねェ」

怖い

塩見が怖い

背後から影も反射しない真っ黒なオーラを出し目は黒から黄色に

鋭い眼光で僕を睨みつけるのは人間ではなく過負荷の化物だった

「俺はとんでもない化物を起こしちまったらｓ「アホな事言って無いで体育館裏まで来い」

少年漫画でよくある表現を使おうとしたけど塩見に止められた

というか過負荷が使えないんだけど

塩見が原因だろうか

「干渉制限（リミットアウト）それが私の過負荷よ。他人の能力による干渉を制限する

と言う物ね」

「使いこなせてるならそれは過負荷じゃなくて異常・・・」

「知らないわよそんな事」

まぁ雰囲気はたしかに過負荷である

とりあえずこの子の前では僕は過負荷が使えないという事らしい

「違うわ。私の攻撃に対して干渉を出来なくする、私からのダメージを他人に押し付ける事が出来ないわけ」

過負荷は使えるけど彼女によるダメージのみ押し付けられないという事らしい

厄介な過負荷に目覚めてしまったものだ

ちなみに魔力による回復も出来ないそうだ

とりあえず

「逃走させてもらうよ。じゃね」

怒りの矛先を押し付ける

が、出来なかった

「やっぱ駄目か・・・」

「逃がさないよ」

「ハンバーガー奢るから許して」

「妥協するわ」

妥協しちゃったよ

早ッ！

ちなみに彼女の好物はハンバーガーである

てことで放課後、マックにて

「あれって美樹さんよね」

「確かに美樹だわ」

上が塩見で下が僕

少し離れた場所で美樹と・・・名前忘れた

なんだっけ

もうブルジョワでいいや

金持ちっぽいし

「何て適当な・・・」

ちなみに塩見のハンバーガーは全て僕のおごりである

１個１００円が２４個

安いが売りのマックでも２４００円になってしまった

いや、ナゲットとポテト、それからコーラもあるからその3倍ぐらいか

全部２４個である

７２００円ぐらい
どんだけ食うんだこいつ
「魔法少女になってからおなかが減ってしょうがないのよね」
「なんだってー」
うん、まぁおいといて
「何の話してるんだろうね」
なんだか随分と深刻な顔だ
「色恋沙汰なら放って置いたほうがいいんじゃない？」
「いやでもさぁ。それでアレが魔女になったら僕の仕事が増えるから嫌なんだよね」
「サボりたいんかい」
「うん」
あ、ブルジョワが店を出た
美樹が驚愕した表情で後退ったようにソファに寄り掛かっている
しばらく呆然としていた

「・・・しばらく尾行する？」

「まぁあのまま放って置いて私の仕事が増えるのも嫌だしね」

「君も過負荷なんだねやっぱり」

僕と同じ事を言う塩見に対して僕はそういう感想を持った

おまけ「久しぶり！ほむほむと太刀洗さん」

「また迷ったわ」

これで2回目

さてどうしよう

とりあえずフラフラしてみる

フラフラしてみるフラフラしてみる

ぴたりと止まった所でとある教室の前

中で一人の少女が寝ていた

目には『はたらかない』と書かれたアイマスク

働くならともかく働かないって・・・

「・・・」

しばらく呆然としていると少女、太刀洗斬子がほむらの方を見る

「んぅ・・・転校生？迷子？」

「え、ええ」

「案内頼むね～」

そう言って再び眠りにつく太刀洗

「え、えぇ～」

案内頼むって誰に言ったんだろう

「・・・って今長者原くん居ないんだった・・・あと2時間したら案内したげるから待って・・・ｚｚｚ」

そして再び眠る太刀洗

「あ、ちなみに私は太刀洗斬・・・こ　グゥ・・・」

爆睡

はたらかないオーラ全開

「に、2時間って・・・」

呆れるほむらを尻目に眠り続ける太刀洗

しばらく考えていると

「どうしたんだ?暁美二年生」

背後から声をかけられた

振り向くとそこには生徒会長黒神めだか

「あ、実はまた迷ってしまって・・・」

「む、まぁこの学校は広いから転校生なら迷ってもしょうがないな。校門まで連れて行ってやろう」

「ありがとうございます」

太刀洗はとりあえず見なかった事にしよう

ほむらはそう思いながらめだかについて行った

「干渉制限、それが私の過負荷よ」（後書き）

てことで太刀洗さんの登場でした

それではまた次回

今回は不定期開催ミニコーナーはやりません

「不幸面してんじゃねぇよ幸せ者」（前書き）

本編短けぇぇぇぇぇえええええええええ！！

おまけも西尾維新原作じゃないしね

でもノベライズは西尾維新担当だからセーフなはず！

ノベライズの方持ってませんが（笑）

大目に見てくださいお願いします

好きなんですあの作品

てことでどーぞ

「不幸面してんじゃねぇよ幸せ者」

美樹を隠れて追いかける

しばらくして魔女退治に出かけるのかマンションから出てくる美樹

でもその足取りはいつもより重かった

しばらくして鹿目がやってくる

「かなめちゃん。塩見さん。なんでそこに隠れてるのかな」

「あり、バレてた？」

「バレてたの？」

「丸見えだよ」

「ちなみにどんな話をしていたのかは聞こえなかったけどいつか化物になる奴が上条くんとやらに告白なんて出来ない的な事を言って居たような気がする」

「丸聞こえじゃない・・・ッ」

怒っちゃった怒っちゃいましたか

このキャラウザくなってきた

止めよ

「まぁとりあえず僕に言えるのはコレだけだ。『不幸面してんじゃねぇよ幸せ者』」

「・・・ッ」

あえて括弧つけて言った

事実であり虚実

今言った言葉は全員に言える事

上条くんとやらも例外じゃない

手が動かない程度の不幸なんて不幸じゃない

例えば吸血鬼になって、なんとか戻れても後遺症が残って、それでも他人の役に立つ為に動く奴もいる

例えば人を待つために自分の時間を止めてほぼ永遠とも呼べる時間を一つの場所で過ごすしかない奴も居る

例えば他人の役に立つ為に生まれてきたと自負する化物も居る

例えば妹を生き返らせたいって願いを叶えたのにその願いが原因で家族全員を失った奴も居る

「好きな人が取られそうになっているぐらいの事で不幸面するな。人間のくせに自分を化物とか言ってるんじゃない。不愉快だ」

悪いけどオブラートになんて包む気はない
過負荷に気遣いなんて性質はない
デリカシーなんてゴミ箱に捨てた
「化物のまま生きてる奴も居るんだよ。たった一人で一つの場所に篭らざるを得ないまま永遠の時を生きてる奴もいる。それを解決方法なんていくらでもある上にまだ不幸にもなってない内から不幸面するな」
不愉快だ
不快だ
腹が立つ
「あんたに何が分かるんだ」
「何も分からないさ。同情なんて残酷なだけだよ」
即答する
容赦ってなに？おいしいの？
「それじゃ、美樹はしばらく休んでた方がいいよ。グリーフシードは譲ってやるからゆっくりしてな」
結局仕事が増えた

でも気にしない

「ちなみに、人間の定義って言うのは感情と思考だけで大体証明出来るから。魂なんてそれを維持する為の飾りでしかない。場所なんて何処でもいいんだよ」

「・・・何の事？」

「キュゥべえとの契約ってさ、願いを叶える代わりに魂をソウルジェムに変えるんだよ。それによっていくら体がボロボロになろうとソウルジェムが無事なら魔力で回復できるって事らしいよ」

「な・・・ッ！」

「まぁ今言う事じゃなかったかもしれないけどさ、いちいち魔法少女の正体が解明されるたびに塞ぎこまれて不幸面されると気分悪くなるから落ち込むなら今のうちに落ち込んでおいた方がいいよ。時間が経てばスッキリするしいっそ開き直って上条くんとやらに告白すればいい。いっそ魔法少女の事全部話せばいいさ。どちらにせよくっつきたいなら話さざるを得なかったろうし。それに振られても魂の場所ぐらいで文句言うような奴なら逆に捨てちゃったほうがいいだろう？」

すっぱりと切り捨てるかそのままでアタックしろよ

それが最悪のルートを回避する方法だ

って安心院さんがこの間夢で言ってたけどコレでいいのだろうか

「安心院さんに教えて貰ったの？」

「うん。ていうか知ってるの？」

「昨日夢に出てきたのよ。安心院なじみ。まったくなんなのあの化物」

「化物というかもう神様って言ってもいいぐらいだよね。ドラゴンボールもビックリのインフレ」

1京ってなに1京って・・・

人間って25億秒しか生きられないのにその何倍？分からん計算するのも面倒

不老不死の異常も持ってるらしいからねあの人

スキルを数えるスキルって何

欲視力は渡しちゃったんだっけ人吉に

何時だったか急にそんな力を使うようになってたけど

アレは安心院さんのだったらしい

影の魔女に止めを刺しグリーフシードを回収する

「さて、今日の仕事しゅーりょー」

おまけ「ほむほむと願いを叶えるミセの主人W」

「ここにこんな家あったかしら・・・？」

ほむらの前にある建物は異質だ

左右に建っているのはごく普通のビル

だがその間に建っている家は明らかにおかしかった

黒い塀、三日月の飾りがついた左右の門の柱

中の家は洋風なのか和風なのかよく分からない家だった

「・・・・・いや明らかにおかしい」

普通の人ならこんな所に来ない

なぜ私はこんな所に来ているのだろう

ほむらの頭の中を回る疑問

だって

「「いらっしゃいませー」」

と声を合わせて見知らぬ少女が2人挨拶してくるからだ

そもそも自分はここに入るつもりはなかった

気が付いたら入っていた

「い、いや私はお客じゃ・・・」

「お客さん?」

奥から出てきたのは奇妙な着物を着た青年

まだ未成年だろうが

目の色が左右で僅かに違う

ちなみに丸い眼鏡をかけている

外見は普通だが雰囲気はまったく普通ではなかった
魔法少女よりも過負荷よりもずっと異質
だがほむらは何か近いものを感じたような気がした
彼は止まっていた
ずっと
「え、いえ私は・・・」
「暁美ほむら」
「なっ・・・!?」
名前を言い当てられた
突然
「鞄」
「え?あ・・・アレ?」
見ると鞄に何か挟まっている
手紙のようだ
宛名には暁美ほむらと書かれている

「読んでいいよ」

「あ、はい？」

何を考えているのか分からないがとりあえず手紙を開く

中身は

『君は今日もまた変人に遭うんだろねきっと　蝶ヶ崎かなめ』

「・・・たしかに遭ったわ」

ぐしゃりと手紙を握りつぶす

「ところで、ここは一体なんなの？」

「ミセだよ。どんな願いでも叶えるミセ」

うさんくさい

そう思った

キュゥべえという前例がある

「当然、対価は必要だけどね」

「・・・対価って？」

・・・って、なに聞いてるのよ私は

困惑するほむらに青年は答えた

「その願いに見合う物。君の願い・・・鹿目まどかを救いたいって言う願いは叶えられないけど、手伝うくらいなら出来る」

「・・・手伝う？」

「ああ。でも対価が居る」

「・・・これなんてどうかしら」

と言って出したのは機関銃数点

「最近の中学生は武装してんのか？」

「私だけ・・・よ」

「なんで迷ったの今？」

ほむらの学校に居る人間は異常者が多い

その中には当然武装してるものも数人（主に風紀委員）

武装せずとも武装してるのと同じような力を持つ化物が数人

「まぁ色々と事情があるの」

「魔法少女？」

「・・・ッ！！」

「その辺の事情には詳しいんだ。なるほど、あの淫獣まだそんな事やってんのか・・・いい加減なんとかしねーとな」

青年が呟く

「警戒させちまったか。ゴメンな」

「いえ・・・」

「まぁ、対価はそれでいい」

と言われたのでほむらは機関銃を差し出した

「いやそっちじゃなくて」

「え・・・？」

「グリーフシード。持ってるやつ全部ね」

「・・・何に使うのよ」

「別に。ただ対価にはギリギリ足りるから」

マル、モロと青年は誰かの名前（？）を呼ぶ

やって来たのは先ほどの少女たち

フルネームはマルダシとモロダシだそうだ

「それじゃ、コレ」

「これは・・・？」

「祓呪の霊弓」

「コレって・・・」

祓呪の霊弓ってなに？という質問ほむらはしなかった

暁美ほむらにとっては見覚えのある物で、何度か助けられそして絶望に落とされた物

そもそもこんな物を何処で手に入れたのだろう

この世界にあるはずが無いものなのに

「・・・」

そして彼女は出会った

一つの場所に留まり続けるミセの主人、四月一日君尋に

「不幸面してんじゃねぇよ幸せ者」（後書き）

おまけなのに長すぎて御免なさい

しかも西尾維新じゃないです

ＣＬＡＮＰです

すみません

魔女の心臓は単純に思いつかなかっただけです

用途は大体考えてありますがネタバレになるので禁止

それではまた次回

とりあえず謝っておきます

すみませんでしたあああああああ！！

追記、魔女の心臓を祓呪の霊弓（仮）に変えました

そっちの方が後々やりやすくなるので

どういうものなのかは大体想像出来て・・・ますよね？

「つんでれ？」（前書き）

今回、ちょっと最後の方、もう少し力入れたかった

でも今の文才ではコレが限界です

すみません

「つんでれ？」

白いのが来た
正確には白い猫が来た
更に言えば白い猫のような人が来た
つまり
羽川翼である
なんでこんな所に居るんだこの人
まぁ今は猫じゃないんだけど
何で来たかと言えばどうやらコレから旅に出るからついでにやって来たらしい
彼女は悪平等の類だと思う
いや、その逆か
平等なとこは同じ
でも悪じゃない
全て平等にゴミとしか思ってないのではなくその逆、全て平等に人間として見ている

ただし何ヶ月か前までだけど

最近はその欠点と呼べる部分が消えた

なぜか髪の色が白と黒の虎柄で毎朝黒染めしてるらしい

例の猫問題を解決した後こうなった

まぁそれは置いておこう

どうせもうどっか行っちゃったし

冒頭の話は今回の物語に一切合切関係ありません

僕は普段どおり家に居た

やる事も無くただボーっとしているだけ

このままだと中学なのに留年だなーみたいなありえない事を考えつつ僕はジャンプに目を向ける

「で、佐倉は何で魔法少女になったんだっけ」

いきなり問う

「いきなりだな」

なぜか今日も家に入り浸っている佐倉と暁美

その佐倉に問いかけをして見た

特に意味も無く

ただの退屈凌ぎ

案外皆それ相応の理由がある

無いのは僕だけだ

「だってさ、美樹に魔法は自分の為に使うもんだって言ったの君でしょ?それに塩見にも言ったんだって?」

「わ、悪いかよ」

開き直るな

「自分の主張を他人に押し付けるのはよくない事だよ。塩見に言う

に至っては自殺行為だ」

彼女は黒神に助けられた身だからアレでもかなり恩を感じているらしい

黒神の為なら死ねるとでも言いたいのだろうかというぐらいに

過負荷には嫌われるよりむしろ好かれる方が厄介と誰かが言っていた

それは多分正しいのだろう

でも嫌われるのもかなり面倒な事になるから気を付けたほうがいい

「うっ・・・」

佐倉も言った時に大分酷い目にあったのだろうか

多分あったのだろう

軽くても内臓破裂は必至な気がする

「塩見・・・正確には今、塩見を引き取ってくれてる黒神の長女、黒神めだかは他人の為に生きるって事を信念にしてるような奴だから。そいつを信仰してるくらいのあいつにそんな事言ったら切れると思うから気を付けた方がいいよ」

「おせーよ！」

「そりゃ悪うござんしたね」

適当な返答

「でもさ、あたしはやっぱり他人の為に生きるやつ見るといらいらするんだ」

黒神は雲仙の言う事が正しければなんだかんだで自分の為に生きてると思うけど

一人ぼっちになりたくないから必死に人間の真似をする化物

それが黒神めだかの正体って雲仙は言っていた

「つーかなんだかんだで佐倉も他人の為に動いてるよね」

「なっ・・・！」

「つんでれ？」

「ち、違う・・！」

「じゃあなんで人に助言するような真似を？間違った助言だからなんとも言えないけど」

自分の為に魔法を使えって言うのは明らかに助言の一つだろう

他人の為に使っていると自分が痛い目に遭うから止めておけ

そう言っているのだ

「でも塩見と黒神、まぁ黒神は魔法少女じゃないけどその気になれ

ば魔法なんて軽く使えるだろうね・・・とりあえずそいつらにその言葉は間違ってるだろう。特に黒神は自分の為に動けば自分が痛い目に遭うと傍から見て思える程に化物だ。それを慕ってる塩見にその言葉を言ったら死ななくても痛い目に遭うのは必至だよ」

「そ、そうなのか？」

「美樹に言うのもマズイね。魔女になられると困るから」

「うーん・・・」

「さて、最初の話に戻そうか。佐倉は何を願って、または呪って魔法少女になったんだ？」

「は？呪う？」

「呪いと願いは同じモノだろう？」

「訳分かんねぇよ。あたしは・・・」

佐倉は自分の過去を話す

結局、佐倉も人の為に願って損したクチだった

でもね

自分の為に願ってもこの世界では損をするんだよ

「ふーん」

「うわっ！全然興味なさそう！」

「でも君さ、やっぱ弱いよね。色々と」

一回の失敗で諦める

その程度のメンタルで良く今まで世界を呪わずに済んだものだ

もしくは単に呪う事すら諦めたのかも知れないけど

そうだとしたら僕らの同類だ

過負荷には程遠いけど

「弱いってどういう事だよ」

「そのまんまの意味。強い人の例教えてあげようか」

「いや、いい。分からなくなりそうだから」

「自分のやってる事が正しいのか？」

「・・・・・・」

図星だったようだ

まぁとりあえず僕はもう寝ようと思う

深夜一時過ぎ

別に僕の場合学校に行ってもやる事無いんだけど

勉強も分からないし

進路は箱庭でいいかな

安心院さんに誘われてるし

過負荷だから別に大丈夫だそうだ

異常として扱われるらしい

でも偏差値異常に高いから担任からは止めておけって言われてる

「おやすみ～」

「いや、早いな」

ちなみに暁美は1時間前に既に就寝済みである

入りびたりすぎだよね

ここってそんなに広くないのに

既にマンネリとなった登校風景

今日は久々に登校して来た志布志ちゃんも居た

予想通り大惨事である

暁美は魔力で治療が出来るので傷を開かれても大丈夫

だと思っていたけれどそもそも戦っているのだから古傷の量は尋常じゃなかった

「酷い目に遭った・・・」

それでも魔法少女なのでしばらく休めば治る

おかげで遅刻だけど

「ごめんごめん。もうしないから許してください」

誠意の欠片もない謝罪を述べる志布志ちゃん

僕は初対面の時、釘バットで頭を殴られた

座っていたソファに傷を押し付けてカッコつけて事無きを得たけど

不慮の事故が無かったら死んでいたとある日の事を思い出しながら

僕は遠くをボーっと見る

そんな感じで今日もいつもと同じ校門を潜った

美樹さやかは今日、学校に来ていなかった

休めってそう言う意味じゃないんだけど

結局失敗だったのだろうかと思ったけどそうじゃなかった

上条恭助も居なかった

「成功・・・かな」

「何が成功なのよ」

暁美はあいつはまた魔女化して周りに迷惑かけるのか的な事を考えてそうだ

でも多分今回は違う

上条恭助も居ないのがその証拠

確か先日の緑は明日の放課後、つまり今日、上条恭助に告白すると言っていたらしい

なら今日中、放課後より前に行動を起こすしか無いだろう

だからって朝か

朝っぱらから学校サボらされて行きなり告られたってどんな気分？ねぇどんな気分？なんて感じの事を試しにやって見たくなったけど確実に美樹に殴られると予想出来るので止めておく

というか上条恭助に殴られそうだ

「じゃあ見物行こうよ。暁美」

「何を？」

「美樹さやかが上条恭助に告白するところ」

「・・・悪趣味ね」

言いながら鞄を持つ君も十分悪趣味の類に入るだろう？

で、公園にやって来て見れば魔女の結界が出来ていた

その結界の中では美樹が魔女と戦っているらしく

その後ろには上条恭助が立っていた

これが安心院さんの仕業なら、多分計画通りなのだろう

「で、なんで佐倉が居るの？」

「いや、魔女の気配がしたからな」

「じゃあ何で見てるわけ？」

「アレを邪魔できるやつが居たら教えてほしい」

だよねー

ちなみに暁美は唖然としていた

今までの時間軸で、上条恭助を美樹さやかがかばいながら戦うなんて事は無かっただろう

美樹は上条恭助を必死に守っていた

声は聞こえないけど叫んでいた

「隠れるか」

「そうね☆」

うわっ！楽しそう！

暁美がめっさ楽しそう！

初めて見たよこんなテンション高い暁美

これでもまだ女子中学生だ

こう言うのを見物するのは結構楽しい事の一つだろう

思春期って他人の告白を覗くのがまだ楽しく感じる時期である

という訳で僕たちは美樹に見つからないよう、魔法を使用して姿を消した

魔女の結界が消え血塗れの美樹とその後ろで呆然と立っている上条の姿

美樹の傷はソウルジェムの力により数分のうちに消えてしまった

「・・・どう思った？」

美樹が口を開く

自虐的に

「私はさ、もう、化物なんだ。魂はこんな石ころになっちゃって」

「・・・」

どうやら魔法少女云々についてはとっくに話し終えているらしい

「それでも、私は続ける。でないと死人が出るから。この街には私と同じ魔法少女が４人居るけど、その内２人は魔女を倒して出てくるグリーフシードにしか興味ないような自己中だし」

失礼なと暁美が言いそうになったようだが口を塞いで堪えていた

「1人は面倒くさがりやでやる気ないし、1人はもう戦えそうに無いし。だから、私がやるしかないの」

でも

「私さ、ゾンビになっちゃったんだ。いくら傷ついてもさっきみたいにあっと言う間に治っちゃうし、その気になれば痛みも消せる。さっきだって痛いのが怖くなったからって、ずっと痛覚を消して戦ってた」

「・・・さや・・ッ」

上条が何かを言いそうになるが堪える

まだその段階じゃない

「いつか魔女になるって言う爆弾を抱えたゾンビ、それが今の私。でもそれでもね。大事な人を守る為に戦いたいって思うんだ。だから私は戦う。もうアンタとまともに話すのも出来ないかもしれない。何時死ぬかも分からないしいつ魔女になるかも分からないけどさ、コレだけは言わせて」

美樹は自分の気持ちを言う

一言

上条恭助がそれになんて答えたかは知らないけど

多分、もう美樹が魔女になる事は無いと思う

それが失恋でも成就でも

どちらにせよ美樹が世界を呪う事は無い

上条恭助が何を言ったかは分からないけど

それは美樹を傷つける物じゃなかった

僕には良く聞こえなかったけど暁美はそう言ってた

佐倉は途中で顔を赤くしていた

ちなみに上条はその後何処かへ行った

美樹はそれに手を振っていた

その顔はスッキリとした笑顔だった

そして

「何見てんだアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

バレてた

当然、その後で美樹、久々の登場、巴、そして鹿目から鉄拳制裁と

説教が待っていた

3人とも

後はワルプルギスの夜を倒すだけ
僕の過負荷の力は最近になって制御が利くようになって来た
過負荷から異常へのシフトかも知れない
よく分からないけど
以前にも問われた問い
安心院さんからの問い
君は本当に過負荷なのかい？
僕は分からないと答えた
その答えは今もなお分からない
でも、多分近いうちに分かる気がする
まぁ
「戯言だけどね」
今までのよく分からない感情は全てそれで纏めた

「つんでれ？」（後書き）

という事でハッピーエンドルートまでそのまま直行させようと思います

ワルプルギスの夜戦にもうあと2～3話もしないうちに入りそうなのにまったく思いつかない

というかどうすべきか

あの弓は使うつもりですが誰に使わせるか

ちなみに候補は以下の通り

暁美ほむら（第一候補）

鹿目まどか（魔力が無いからムズイ）

蝶ヶ崎かなめ（主人公だしね）

安心院さん（美味しいとこだけ持っていく！）

黒神めだか（美味しいとこ（ｒｙ）

以上、４人です

恐らくはほむらになると思います

それでは

「主人公だから」（前書き）

こんちわー

テスト前日にも関わらずこんな時間まで起き、しかもまったく勉強をしていないばふんです

ユーザーネーム変えましたが前書き後書きでは変わらずばふんで行こうと思います

じゃあ変えるな？

従兄弟や知り合いに見られたくないんですよ

「主人公だから」

公園のど真ん中で正座されている僕、佐倉、暁美
そしてその目の前で仁王立ちをしている美樹
ちなみに既に見滝原の制服に戻っている

『オィィィ！何あたしに正座の辛さを押し付けてんだ！？』

『そうね。あなただけ何も感じていないなんて不平等よ』

『人生とは理不尽で不平等な事ばかりだよ。むしろそれしかないさ』

『いつもの哲学っぽい戯言で誤魔化そうとするな』

『受け入れる事だよ暁美、佐倉。不条理を。理不尽を。堕落を。混雑を。偽善を。儀悪を。冤罪を。流れ弾を。見苦しさを。みっともなさを。嫉妬を。負幸せを。不都合を。風評を。密告を。格差を。裏切りを。虐待を。巻き添えを。二次被害を。愛しい恋人のように受け入れる事だ。そうでもしないと魔法少女なんて理不尽な仕事やってられないよ』

とテレパシーで佐倉と暁美に言った瞬間拳骨が僕たちに飛んできた
当然のように佐倉に押し付けた

「拳骨の痛み押し付けてんじゃねぇ！」

「テレパシーでひそひそ話すな！！というか私に全部聞こえてるからね！？同じ魔法少女なんだから！というかかなめ！あんたのその台詞って他人からパクったモノでしょうが！！」

あ、バレた？

「生徒会戦挙で球磨川が言ってたの聞いてたよ・・・」

「というか見に来てたの？」

「生徒会側を応援したくて。行って後悔したけど」

あんな凄惨な戦いだとは思わなかったらしい

所詮は中学校のごっこ遊びだと侮っていたそうだ

実際は一応ルールのあるものの傍から見れば殺し合いである

事実、人が2人死にかけた

ハブに咬まれて

そんな春ぐらいに起きた生徒会戦挙

「さ、さやかちゃん・・・」

隣で呆れている鹿目

ちなみに途中で抜け出した僕らを追ってきたらしい

当然美樹に詰め寄られたけどやって来たばかりの鹿目は先ほどの光景を見ていなかった為許された

今は僕たちを説教する側に回っている

そしてなぜかいる巴

巴曰く

『出番がほしかった』

そうだ

メタ発言言ってんじゃねぇ

あと君の出番はコレだけだから

「あんまりだッ！！」

涙を流しながら駆けて行った

そんな巴を見届けながらおとなしく正座を続ける僕達

当然のように足の痺れを押し付けつつ

拳骨の痛みも押し付け僕はとりあえず外ッ面だけ反省する

「あんた・・・腐っても過負荷ね・・・ハァ」

呆れながら溜息をつく美樹

「いやいや、君に見捨てられたら誰が僕を更正させるんだい？」

「全然更正する気無いわよね」

「うん」

拳骨が飛んできた

やはり痛みは押し付けます

「私さ、あんた殴っても痛い目見るのは私と関係ない人だけな気がするんだけど」

「今頃気づいても遅いんじゃない？」

痛むのは美樹の拳と僕が痛みを押し付けた

暁美だけだ！！

「うぅ・・・」

頭を押さえる暁美

今回の拳骨は渾身の一撃だったようだ

会心の一撃だろうか

どっちでもいい

若干涙目になって初期のキャラが壊れかけている暁美を尻目に僕は
正座を続けた

結局、説教の途中、当然のように鹿目も参加した

僕達全員遅刻扱いだった

「大変だなお前ら」

と言っていたのは佐倉である

そもそも学校に通っていないからだろうか

まったく無責任な

そもそも誰のせいだと思っている

「「お前だろ！」」

暁美までお前呼ばわりである

そんな感じで家に帰ると

「やぁ」

安心院さんが居た

白い髪に巫女服、手を前で交差させその手には螺子が突き刺さっている

夢の中の彼女とは随分と違う風貌

現在『封印（弱）』付与中

というかなんで居るのだろう

唖然としている後ろの2人を尻目に安心院さんは用件を言う

「うん？いやそろそろワルプルギスの夜が来るだろうから作戦会議に参加させて貰おうと思ってね。ちなみに、見滝原の異常と過負荷の全員にその情報は余すところなくツイッターで教えてあるから」

当然スキルを使って特定の人物に限り絶対に信じると言うようにしてあるらしい

1京のスキルは伊達じゃない

そんな訳で、明日、学校の生徒会室で会議を開くのだそうだ

生徒会の連中も入ってるのか

「ねぇ」

暁美が安心院さんに話かける

「貴方が誰かはどうでもいい。ただワルプルギスの夜は私たち以外には見えないわ」

「どうだろうね。異常の連中の何人かは男女関わらず見えると思うよ」

まぁ確かに

行橋は電磁波で否が応でも存在を感じ取るだろうし

都城は否が応でも姿を現すよう命令しやがりそうだし

存在くらいは感じ取るかもしれない

人吉は見えないにしても誰かの視線を借りれば見える

欲視力って便利

黒神は魔法少女の素質は確実にあるだろうから見える

というかあいつに無い素質ってあるんだろうか

素質が無い事が無さそうだ

あ、動物に好かれる素質だけは無かった

「見えるね多分」

「見えるだろうね多分」

「「あはははははは」」

置いてけぼりにされている暁美と佐倉を尻目に僕と安心院さんは話を続ける

明日の放課後、生徒会室に集合

多分全員は入りきらないだろうから集まったらすぐ会議室へ

生徒会長権限と理事長権限

ちなみに、安心院さんは見滝原中学の理事長である

というか異常が集まる学校の大半の理事長やってるねこの人

「まぁそんな訳だから。僕としても個人的にやっているフラスコ計画を頓挫させられても困る訳だ。それもたかが魔女ごときに。とりあえず前線はめだかちゃんと王土くん辺りに頼もうか」

「ちょ、ちょっと待って！」

暁美が間に入ってくる

「めだかってあの生徒会長でしょう！？確かに彼女は異常とは聞いてたけど・・・」

「彼女に勝てる生き物はこの地球上には哀川潤ぐらいしか存在しないよ」

だって彼女はこの世界がジャンプの世界だとしたら主人公だから

どんな勝負でも初めから勝利が確定している存在

どんな強大な敵だろうがどんな不利な状況だろうが一度負けた相手だろうが必ず勝つ

それが主人公で黒神めだか

「完成という異常を持っているという事もあるけど」

どんなスキルでも本人が１０割使えるのなら黒神は１０全に使える

そんな異常

もしかすると魔法も使えるかもしれない

以前、彼女は自分でも言っていた

自分は人間の真似をして遊んでいる化け物だと

その通りだよ

でも安心院さんも人の事言えないし哀川さんも言ってないけど言えないよね

哀川さんと黒神はそもそも相容れない存在の筈なのに、なぜか相対してしまった

今の所面識がある、程度の関係でしかないけれど、もしも哀川さんと黒神が共闘、もしくは対立なんてした日には世界が滅ぶねきっと

「・・・・・・・・・」

呆れる暁美

「まぁともかく、この街には異常な人間がたくさん居る。でもその中でも黒神は人間ではなく異常な化物という部類に入っているんだよ」

「いやまったく分からない」

「分からなくていいんだよ。ただの中ニの妄想っぽい現実だから」

そんな感じで今日の話は幕を閉じた

最後に一言

あの自分勝手なやつが多いメンバーで作戦会議なんてやってもグダグダになるだけな気がする

「主人公だから」（後書き）

段々クオリティがおちていくのはプロットを作っていないからです

ところでプロットってどうやって作るのか教えてください（今更！？

ちなみに、現在蝶ヶ先かなめのイラストを製作計画中

まだ製作には入っていませんがその内

それではまた次回～

「0824434090624709275982567962796985

試験終了まであと・・・2日ッ！！

それが終わったら短縮授業で50分の授業が40分になって

その次の週から10連休、なんか無駄に長いのは進学講座（作者は非参加自宅学習）があるから

そして2日ほど学校行って終業式

いっそ10連休の前日に終業式をやればいいのにと思うのは作者だけではないはず

そんな読者にとってはどうでもいいスケジュールを公表

それではどーぞ

「0824434090624709275982567962796985
作戦会議は今日の放課後である
でもその前に話しておきたい人がいる
巴マミである
「あ、来た」
「こんな所に呼び出して何か用かしら」
「こんな所って・・・」
ここ屋上だよ
しかも昼休み
僕が呼んで何かおかしい事でもあるのだろうか
まぁ用はあるけど
「ゴメンなさい。一度言ってみたかったの」
「そんな理由かい」
意外とお茶目だった
「あと何の用かって言うのは呼ぶ時に言っておいた筈だけど」

「ワルプルギスの夜の事でしょう?」

「その通り。ちなみにツイッター見てたならもっと詳しいとこまで知ってるはずだけど」

「生憎私はツイッターやってないの。というかパソコン持ってないわ」

ケータイもね

と巴

まぁ両親が居ない家にパソコンやケータイと言った物は家計的に辛いか

両親の遺産で暮してるんだから

職につくのも年齢的に無理だし

友達も居ないっぽいし「余計なお世話よ!」

「でもツイッターの事は知ってるんだね」

「最近有名だしね」

「じゃ、そろそろ本題に入ろうか」

コンビニで買ったパンを齧りながら言う

本題というのは

「今日放課後、ワルプルギスの夜、討伐会議をやるらしいんだけど。巴は契約する？それともしない？」

「・・・」

「詰まっても答えはでないよ。僕としてはどっちでもいいんだけど、安心院さん曰く人員は多いほうがいいってさ」

「安心院・・・って理事長？」

あれ、知ってたか

「理事長の名前ぐらい知ってないと駄目でしょう」

「大半の人間が知らないと思うんだけど」

そもそもあの人自分の存在隠蔽してなかったっけ

謎だ

魔法少女にはその手のスキルが効果ないのだろうか

「まぁそんな訳で、ワルプルギスの夜を鹿目まどかが契約する前に＊したいから手伝ってください先輩」

「鹿目さんが契約する前って・・・どういう事？」

「それが暁美ほむらの願い。良かったら聞かせてあげようか。どち

らにせよ、君にはコレを話しておかないと契約した所で暁美と険悪な仲になりそうだし」

「確かに、私はまだ暁美さんを信用してないわ」

「余計な相槌はいりません」

僕は暁美ほむらの過去を話す

詳しい事は面倒だから東方風に誤魔化そう

少女説明中

「・・・という訳なんだけど」

「それ、本当なの？」

「事実だよ。安心院さんも肯定してた」

「安心院さんがなんでそんな事知ってるのよ」

「あの人並行世界を移動するスキルまで持ち合わせてるから」

詰まるところただの化物

化物と言えば例の吸血鬼コンビは来てくれるのだろうか

「なるほど、それが本当ならキュゥべえを狙ってたのも納得が行く

わ。というか貴方の考察、正解だったのね」

「偶然だよ。過負荷はその辺察するのが得意なんだ」

「あの時、ストックがあるにも関わらずキュゥべえが助けを呼んだのは」

「暁美ほむらを悪役にし、鹿目との契約を邪魔されない為」

結局邪魔されたけどね

それどころか魔法少女を1人、なんの意味もなく失うという大失敗

「そんな存在にまた私を引き込むつもりなの？」

「どうだろうね。僕はキュゥべえと契約して欲しいって言ってる訳じゃないから」

「どういう事」

「詳しくは生徒会室で」

足元に現れたキュゥべえを踏み潰し屋上から投げ捨てながら最後に全て投げ捨てる

そして作戦会議へ

いやゴメンじょーだん

「それでは第一回！ワルプルギスの夜討伐会議を開催する！ちなみに司会はこの私、生徒会長の黒神めだかだ！」

凛ッ！という擬音が聞こえたような気がする

「何か案はあるか」

「はい」

とりあえず上げてみる

「蝶ヶ先二年生。言って見ろ」

「名瀬ちゃんに頼んで全員改造人間に「却下」」

即答

早いよ

無理だろうとは思ってたけどさ

「めだかちゃん。いっそ強化合宿受けさせたらどうだ？俺たちも受けた奴」

「善吉、それを一般人にやらせるのは危険過ぎないか？」

「黒神、僕は賛成だよ。魔法少女はコレでも場数踏んでる訳だし、その程度じゃ死なないって」

「ふむ、とりあえず候補に入れておこう」

黒神が黒板に書く

相変わらずの達筆、というかなんでペンで筆で書いたような綺麗な字が書けるのか、ぜひご教授願いたい

そんな感じで案が出ていく会議室

暁美は本当にやる気があったのだろうか

全員で一気に攻めるとかそんなんしか出さない

まぁ中学生に戦術を考えろなんてのは無茶だったろうけど

ちなみに現在出た案をまとめてみると

・言葉の重みが効果あるらしいので言葉の重みで地面に落下させてから叩く

コレには王土と黒神の力が必須である

・いっそなかった事にしちゃえばいいんじゃないかな

やる気あるのか球磨川先輩

その案は当然のように却下された

存在をなかった事にしても根本的な解決にはならない気がしたから

・８２６０８２６７２０６７２９６７２８

分からんて雲仙姉

というか何時の間に入ってきた

・０８２４４３４０９０６２４７０９２７５９８２５６７９６２７９６９８５６２９

二つも要らん

つーか喋るな

というか黒神、訳せるんだから日本語で書け

まぁこんな感じで進んでいった

ところで雲仙姉は追い出した方がいいのではないだろうか

つーかこの学校って戦術のスペシャリスト居なかったっけ

考えるのが面倒になって来たので適当に格言（？）でも考えて見る

嘘は泥棒の始まり

でも泥棒って自分に正直だよね

正直は泥棒の始まりの方が正しいんじゃない？

まぁ戯言なんだけどね

何時の間にか作戦会議はお茶会に変貌していた

お茶会というよりこのノリは宴会に近い

ただし酒は流石に出ない

ジュースどまり

途中、安心院さんと不知火がお菓子やらジュースやらを持ってきた
結果がコレである

皆なんだかんだでお祭り好きなのだろうか

一人取り残されている僕は板チョコを齧りながら途方に暮れていた

あ、もう一人取り残されてる奴いた

誰かと言えば暁美である

「混ざらないの？」

「あなたもね」

「いや僕はこのノリにはついていけなくて」

「私もよ。昔はついてイケたと思うんだけど」

そう言いつつ遠い目をする

「今日ぐらいはしゃごうか」

「・・・そうね！」

そしてお菓子の中に突入

お菓子の量は明らかに多い

シャルロッテとの戦いを思い出した

あそこのお菓子美味しそうだったな

なんて事を考えつつ適当な菓子を口に入れる

これは・・・ッ！この味はァァァ・・・ッ！！

普通だァァァ！！

なんて料理漫画みたいなリアクションを取って遊んでいる球磨川先輩なんかが居たけどみなかった事にした

佐倉が負けてられないなみたいな視線を送っていたのもスルーの方向で行こうと思う

突然佐倉に球磨川先輩が殴られた

タイヤキの食べ方が原因だった

そんな感じで、作戦会議の名を借りた前夜祭は盛り上がって終わった

前夜、と言ってもワルプルギスが来るのはまだ先だけど

「0824434090624709275982567962796985

高校特定されたりしないよなとか不安になりつつ終了

次回はちょっとどうでもいい話を一話

それではまた次回～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5985t/

過負荷の魔法少女

2011年8月1日21時15分発行